明治四十三年七月二十日發行

(明治二十年十一月本會創立)

婦人衛生雜誌

第二百四十號

第三種郵便物認可明治廿六年四月四日
毎月一回二十日發行
內務省許可明治二十一年二月二十八日

私立大日本婦人衛生會

婦人衛生雜誌

第二百四拾八號目次

●會　告●

●本月は前半期決算期に候間會費未納の御方は本年十二月迄の前金相添へ此際本會事務所へ宛御送金被下度候

●前金切れの御方は此際御送金被下度候也

本會の振替貯金口座番號一〇六〇〇番に付右番號を御承知の上所在の郵便局に於て該用紙御請取被下指定の欄内へ送金高、拂込人住所氏名、及び加入者住所氏名（即ち本會）等を記入し同時に金圓御拂込相成候はゞ直ちに本會へ送金無料にて相屆き且つ途中紛失及び盜難の憂ひも無之候又該用紙裏面に通信文欄有之候間他に用事ある節は何なりとも御記入差支無之候、右の如く拂込人に取りては安全、輕便、經濟等一擧にして種々の利益ある便法に付自今該法を御利用被下度此段會員諸姉に稟告致候也

○本誌には會員諸姉の御便宜を謀り特に振替貯金拂込用紙を添付致置候間御用ゐ被下度候

○爲替御送附の節は本會事務所宛にて麹町區富士見町郵便局へ御振出しを乞ふ

私立大日本婦人衛生會

山形支會規則

第一條　本支會は私立大日本婦人衛生會々員山形市在住者を以て組織す●第二條　本支會に會長副會長の外幹事四名評議員若干名を置く會長副會長は公選し幹事評議員は會長之を選任す役員の任期は一ヶ年とす●第三條　本支會は毎月一回(第一日曜日)講話會を開き毎年一回(五月)總會を開き講話の外役員の選擧庶務會計の報告をなす●第四條　入會せんと欲するものは宿所姓名竝に第五條の通り會費を添へ會員に紹介を依賴すべし本支會を退會せんとする時は其旨幹事に申出づべし●第五條　本會々費は會計幹事に納むべし但し六ヶ月又は一ヶ年分新に入會のものは其月より六月又は十二月迄の分を一時に納むべし●第六條　服裝は精誠質素なるを要す上着羽織は絹布を用ゆるを禁す

明治三十三年二月四日創立

事務所山形市旅籠町新築西通二百八十九、北島氏方

山形支會

私立大日本婦人衛生會

宇都宮支會規則

第一條　本支會ハ私立大日本婦人衛生會宇都宮支會ト稱ス●第二條　本支會ニ會長一名副會長一名評議員拾五名幹事四名ヲ置ク會長副會長ハ公選シ評議員幹事ハ會長之ヲ選任ス各役員ノ任期ハ一ヶ年トス●第參條　毎月一回(第一日曜日)講話會ヲ開キ毎年五月講話ノ外役員ノ改選庶務會計ノ報告ヲナス●第四條　入會ハ宿所姓名ニ第五條ノ通リ會費ヲ添ヘ事務所ヘ申込ミ又ハ會員ニ紹介ヲ依賴スベシ本支會ヲ脫會又ハ本會ヲ退會セントスル片ニハ其旨事務所ニ屆出ヅベシ●第五條　本會々費ノ外別ニ支會々費ヲ要セズ會費ハ一時ニ六ヶ月又ハ十二月分、新タニ入會ノモノハ其月ヨリ六月又ハ十二月迄ノ分ヲ納ムベシ●第六條　本支會ハ別ニ支會々員ヲ置キ支會會費トシテ一ヶ月金五錢ヲ納ムルモノトス●第七條　講話會ニ出席ノ節ハ成ルベク家族又タハ知合ノ婦人ヲ誘引シ傍聽セシムベシ●第八條　服裝ハ精誠質素ナルヲ要ス上著羽織ハ絹布ヲ用フルヲ禁ズ●第九條　特ニ支會規則ニ掲ゲザルモノハ本會ノ規則ヲ準用ス

事務所宇都宮市傳馬町三十三番地、行森氏方

明治三十四年二月三日創立

宇都宮支會

私立大日本婦人衛生會

新潟支會規則

●第一條　本會は大日本婦人衛生會に屬し婦人衛生の研究を目的とし兼ねて一般慈善事業を爲すにあり●第二條　當支會の會費は左の六種とす終身會員一時限り出金貳拾五圓特別會員毎月金參拾錢通常會員同金貳拾錢支會員甲毎月金拾錢乙同金五錢●第三條　入會せんとするものは役員に申出て其承認を得べし●第四條　會費毎月拾五錢以上を納むるものには本會衛生雜誌を配布す●第五條　會費は雜誌料として一部を本會へ納め殘金は銀行へ貯蓄して衛生慈善資金とす●第六條　支會には會長一名副會長一名評議員十五名幹事五名理事一名を置く會長副會長は總會に於て公撰し評議員幹事は會長之を撰任す各役員の任期は一ヶ年とし再撰するを得役員は總て無給とす●第七條　支會は毎月六日通常會を開き衛生及び慈善に關する演說をなすべし●第八條　毎年一月總會を開き支會の要務を擧行す●第九條　本會は毎年春期懇親會を催し時宜によりては慈善販賣店慈善演藝會等を開くことあるべし●第十條　天災事變に際し慈善救濟を要する場合に於ては特に會員中の有志者より物品の寄贈を募ることあるべし會員外の篤志者より臨時金品の寄附あるときは役員の協議を以て特待員又は贊成員となすべし●第十一條　一般慈善事業の贊助天災事變の救濟の事務は役員會の決議によりて實施するものとす●第十二條　支會々員は服裝其他を質素にし集會の際は可成く綿服を著用すべし●第十三條　特に本規則に揭げざるものは私立大日本婦人衛生會の規則を準用す

明治二十九年四月創立

事務所新潟市本町通十三番戸中村しげ子方

新潟支會

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや智識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一年を送らんを皆ともに希はざるはあらじされども其身健康にあらざれば此生活を得んをいと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も／＼衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして皆吾等婦人のもつぱら學ぶべき所其責任重しといふべし今や婦人の會合相尋て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは眞に喜ばしきことなりされども夫の衛生の事に至りては更に注意を惹かざるものゝ如くまことに口惜しきことなり因りて頃日同志婦人集ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一回集會を開き學識經驗ある人々に衛生上諸般の講義演說談話を乞ひ互に相研究し尚之を筆記して册子を編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに盡すあらんとす故に本會旨趣の梗概を敍べて廣く江湖の諸愛姉に告げ其賛成を仰ふぐことしかり

明治二十年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則摘要

（明治卅二年十二月改正）

第一條　目的　本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ以て社會全般の幸福を增進するにあり●第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設く●第三條　本會會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得●第四條　入會の節は姓名族籍住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員章を交付す（交付手續は末に詳なり）入會後は移居等あるときは速に事務所に報知せらるべし●第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす、終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ヶ月金三拾錢以上、通常會員は一ヶ月金拾五錢を納むる者とす●第六條　男子にして本會の旨趣を賛成する者は之を賛成員とす其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に賛成員たることを望みたる節は役員の協議に依り無會費とすることあるべし●第七條　會員は本會に於て毎月發刊する雜誌を無料にて受ることを得●第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返戻せず●第九條　本會に推薦員を置き其中より總裁一名を奉し皇族の妃殿下に願出るものとす●第十條　本會に左の役員を置く會長一名、副會長一名、幹事七名、評議員二十五名、書記若干名●第十一條　會長副會長幹事評議員は隔年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は幹事の推薦に依り會長之を命ず但書記は都合に由り會員外の婦人若くは男子に推囑することあるべし●第十二條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事は[illegible]書記は役員の命を受け[illegible]第一會計、第二編輯出版、第三庶務とす●第十三條　[illegible]●第十四條　會長副會長幹事評議員の任期は二ヶ年とす滿期再選することを得若し任期中缺員を生ずるときは[illegible]●第十五條　會長副會長幹事評議員は無給とす書記には相當の報酬を給す●第十六條　集會は例會總會及評議員會とす集會は八九月を除くの外毎月一回とし總會は三月に之を開く若し急要の事あるときは臨時總會を開くことあるべし又春秋二回會員相互の[illegible]●第十七條　毎會學識經驗ある人々に衛生上の講義演說談話等を請ひ會員をして隨意聽講せしむるものとす●第十八條　會員は家族の婦女若くは知己の婦人を本會々場に誘致し講義演說等を傍聽せしむることを得（衣服は總て質素たるべき事）●第十九條　講義演說等は男子の傍聽を許す●第二十條　規則の改正其他重要の件議定すること●第廿一條　前條三月總會に於て會計の收支決算並に庶務の概要會員の增減等を報告すべし●第廿二條　本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす●第廿三條　會計の收支は總て會計主任の幹事檢印を要するものとす●第廿四條　會計は一ヶ年毎に決算し翌年三月總會に報告すべし

支會●第廿五條　地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得●第廿六條　本會々員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記載して申出べし爾後員數增減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報告すべし本會會員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することを止め支會の規定に依るものとす●第廿七條　支會には支會限りの會員を置くことを得●第廿八條　本會の雜誌は支會に回送すべきを以て其實費を支會より本會に送付すべし支會限りの會員にして雜誌を請求する者に就きても亦同じ●第廿九條　支會は集會の度に其狀況を本會に報告すべし

●雜件

第三十條　本會は毎月一回雜誌を發刊し之を會員に配附すべし●第卅一條　會員又は會員外の者にして金品若くは書籍物品等を本會に寄贈する者ある時は本會々長の名を以て謝狀を贈り寄贈者の姓名及品目を雜誌に登錄し尚本會雜誌を以て報告すべし●第卅二條　會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送費として別に返信料を添へらるべし（郵券送一割增）●第卅三條　會費は東京府下に限り毎月頒收人を差出すべし地方會員は總て前金とし小爲替にて本會事務所々在の郵便局（麴町區富士見町郵便取扱所宛）振出さるべし●第卅四條　會員中若し本會の障碍となるべき所爲ある者又は屢々會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若しくは廣告することあるべし

東京市麴町區富士見町二丁目卅二番地　私立大日本婦人衛生會

○役員姓名

總裁 東伏見宮依仁親王妃周子殿下

會長 侯爵夫人 鍋島榮子

副會長 男爵夫人 濱尾作子

（いろは順）

幹事 鳩山春子
同 羽田三緒子
同 岡田德子
同 高木錄子
同 山本多穗子
同 松平芳子
同 三浦敬子

評議員 石川貞子
同 岩下ゆか子
同 濱田捨子
同 長谷川仲子
同 服部繁子
同 仁禮壽賀子
同 西升子
同 土肥多越子
同 緒方悦子
同 岡山とし子
同 小川孝子
同 男爵夫人 加藤鈴子
同 片山龜子
同 吉武輝枝子
同 丹波貞子
同 高橋孝子

評議員 田村きよ子
同 男爵夫人 南部殷子
同 中濱芳子
同 山口貞子
同 子爵夫人 松井正子
同 岸澄子
同 三宅藤子
同 宮本樂子
同 宮下咲子

●支會、新潟、山形、宇都宮、高崎、米澤

本會特別贊成員（いろは順）

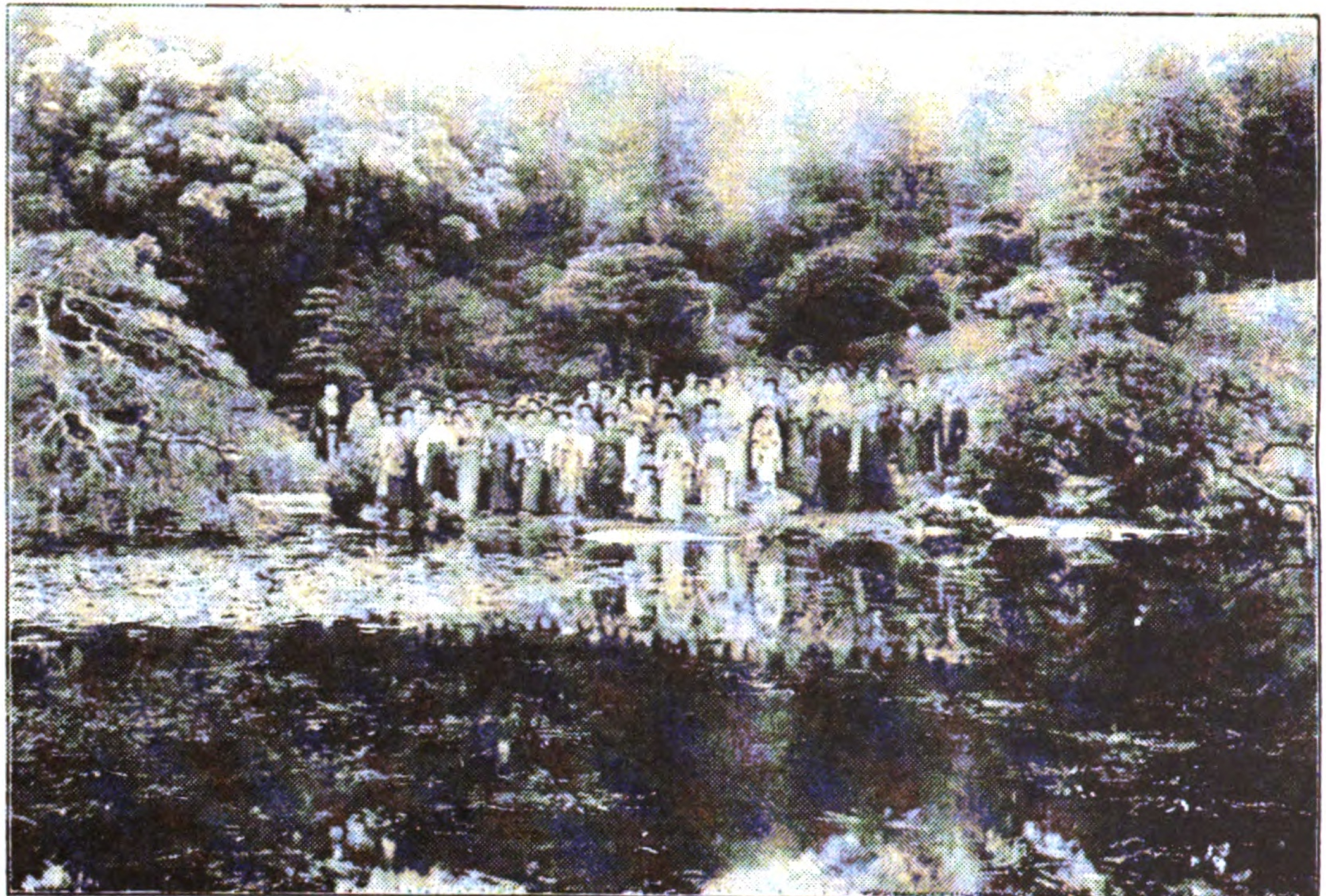
醫學博士 入澤達吉君
理學博士 石川千代松君
醫學士 石原久君
醫學士 石原喜久太郎君
理學博士 飯島魁君
ドクトル 飯盛挺造君
醫學博士 伊藤隼三君
ドクトル 伊澤信平君
醫學博士 伊東祐彦君
色川圀士君
岩井禎三君
藥學博士 石津利作君
醫學士 磐瀨雄一君
長谷川泰君
法學博士 鳩山和夫君
萩原彌四郎君
醫學博士 林春雄君
原胤昭君
醫學士 橋本左武郎君
醫學博士 濱田玄達君
男爵 濱尾新君

醫學博士 芳賀榮二郎君
西田敬止君
ドクトル 西山信光君
本田增次郎君
醫學士 鳥居春洋君
醫學博士 土肥慶藏君
醫學博士 遠山椿吉君
醫學博士 大澤謙二君
醫學士 大野豐太君
醫學士 大西秀治君
子爵 小笠原長生君
ドクトル 小此木信六郎君
醫學博士 岡田榮吉君
醫學博士 岡田和一郎君
恩田重信君
醫學博士 緒方正規君
醫學博士 大澤岳太郎君
醫學士 渡邊房吉君
醫學博士 加藤照麿君
法學博士 男爵 加藤弘之君
醫學士 河野衛君
醫學博士 河本重次郎君
醫學博士 金杉英五郎君
醫學博士 片山國嘉君
醫學士 賀古鶴所君
醫學士 樫田龜一郎君
醫學士 唐澤光德君
醫學士 甲野棐君
醫學士 米山彥郎君
横井忠國君
醫學博士 高橋順太郎君
男爵 高崎正風君
高嶺秀夫君
醫學士 高田畊安君
ドクトル 高山紀齋君
藥學博士 田原良純君
醫學博士 田代義德君
醫學士 田村光顕君
醫學士 田村化三郎君

醫學士 竹中成憲君
藥學博士 丹波敬三君
法學博士 高木豐三君
醫博、男爵 高木兼寬君
理學博士 坪井正五郎君
醫學博士 土田卯三郎君
男爵 辻新次君
醫學博士 中濱東一郎君
醫學博士 長與稱吉君
藥學博士 長井長義君
男爵 南部寬男君
醫學博士 能勢靜太君
醫學博士 久保猪之吉君
醫學博士 栗本東明君
醫學士 栗本庸勝君
醫學博士 隈川宗雄君
醫學博士 呉秀三君
醫學博士 山田鐵哉君
醫學士 山田弘倫君
醫學士 山根正次君
ドクトル 山上兼輔君
ドクトル 松山陽太郎君
丸山長四郎君
ドクトル 富士川游君
布施正頴君
男爵 後藤新平君
醫學士 古川榮君
小高良造君
小西信八君
醫學士 寺田織尾君
醫學士 寺田豐作君
寺田勇吉君
醫學博士 朝倉文三君
子爵 秋元興朝君
足立寬君
ドクトル 朝山義六君
醫學士 淺田決君
醫學博士 佐藤達次郎君
醫學博士 佐々木政吉君
醫學博士 榊順二郎君

醫學博士 榊保三郎君
醫學博士 櫻井恒次郎君
醫學博士 佐藤三吉君
齋藤清文君
醫學士 笹川三男三君
醫學士 櫻井郁二郎君
ドクトル 佐藤達雄君
醫學士 佐藤德齊君
醫學士 澤崎寬制君
ドクトル 佐伯理一郎君
醫學博士 木下正中君
醫學博士 桐淵鏡次君
醫學博士 木村德衛君
醫學博士 北島多一君
醫學博士 北里柴三郎君
醫學士 北村楠造君
醫學博士 北川乙治郎君
ドクトル 菊池循一君
醫學博士 三輪信太郎君
醫學博士 宮本叔君
宮本仲君
宮川保全君
理學博士 箕作佳吉君
水原漸君
醫學博士 三宅秀君
醫學博士 三浦謹之助君
醫學博士 三島通良君
醫學博士 三浦守治君
島田三郎君
ドクトル 志村誠齋君
醫學博士 島村俊一君
ドクトル 日高昂君
醫學博士 弘田長君
伯爵 土方久元君
醫學士 百瀨玄溪君
醫學士 森田正馬君
文學博士 森林太郎君
醫學士 澄川德君
ドクトル 永田卓財君

私立大日本婦人衛生會總會及春季懇親會



小石川植物園泉水中島ニ集合セル會員ノ一部
(明治四十三年五月二十八日)

婦人衞生雜誌第二百四十八號
（明治四十三年七月二十日發行）

講演

腸窒扶斯豫防の心得

（明治四十三年六月四日婦人衞生會講話會ニ於テ）

醫學博士　二木謙三

今日は窒扶斯のお話をせよと云ふ仰せで御座いまして、其窒扶斯と云ふものが此世界に現はれましたのは何時であつたかと申しますと、遠き太古の時代でありまして、其太古の時代より今日に至るまで、東西兩洋共に繁華の都市には、年々此窒扶斯が間斷なく人間を冒しつゝあつたのであります。殊に近年に至りましては、日本に於ける所の流行が又激しくなつて參りまして、西洋などに於きましては、近來或文明の都會では、此窒扶斯の流行は、衞生の設備の進歩と共に漸次に減少し來りつゝある今日、我國―即ち此文明の日本に於いては、尙此病氣が蔓延をすると云ふことは、是は決して拱手して見て居ることの出來ぬ次第であります。縱令是が人間の生命を奪ふところの數に於いては、左程多くないとして見た所が、其病氣を國內に置くと云ふことは、國民の恥辱であります、夫故に此病氣を防ぐと云ふことは、官一ッの手にのみ委ねて置きませんで、官民共同して是を逐退けなければいかぬのであります。

殊に其方面に向つては、御婦人方の助力を仰がなければならぬ點が澤山あるのであります。

年々日本で、此病氣に罹るところの人は數萬と云ふ數でありまして、又此東京市內のみに於ても、年に是迄は千六七百人でありました、ところが今年の流行は非常でありまして、一月から此五月に至るまで

の間に、既に千七百餘人の患者を出して居ります、即ち例年の一ヶ年分の患者は、今年の上半期に於いて已に超過して仕舞つた譯であります。さうして一日に出る數が、一時は何れ位であつたかと申しますると、東京市内に毎日三十三名宛新患者が發生して居りました。此頃は稍〻減じて二十六名となり、二十五名となつたのであります、今日でも尚二十四名宛毎日患者が出て居ると云ふ有樣であります。そこで此豫防撲滅をするには、病氣の性質を究めなければならぬのでありますから、先此病氣の原因から御話致します。

此病原に就いては、太古の時代にもやはり此病氣は感染する病氣であると云ふことは考へて居つた。さうして其れが如何にして感染するかと申しまするこどに就いては、昔は少し今日の考とは違つて居りまして、此病氣が傳染するのは、何か惡るい所の瓦斯があつて、其瓦斯を吾々が吸ひ込みまするど云ふと病氣に罹る、例へば患者を見舞に參りまして、患者の胸を開くとか、或は夜具を剝ぐ時に、一種熱臭い臭がある、其臭を嗅ぐ人に傳染すると昔は考へて居りました。殊に、其惡いところの瓦斯は、何處から出て來るかと申しますと、患者の身體より出る所の、例へば汗とか尿とか、便とか云ふやうなもの丶腐敗した、其臭氣の內に病毒が籠つて居つて、それを吸入する人に感染すると思つて居りました。是を瘴氣性の傳染病と稱へまして、それは惡い瓦斯と云ふ意味で、其瘴氣に觸れて病が起ると考へて居りました。さう云ふ考へがズット太古の時代から近いところまでは、左樣に考へて來ましたが、今より五十四年前の事であります、初めて或學者が一の說を立て丶、此窒扶斯の流行は、決して惡い腐敗した所の瓦斯に因つて起るところのものでなくして、反つて新らしく排泄せられたるところの、患者の尿或は糞便に由つて、患者より健康者に感染するものであると云ふ所の、ゑらい卓說が世に現はれて參りましたのは、今お話した僅か五十四年前のことでありました。夫

から以後は、段々窒扶斯と云ふものゝ病理學、其他が發達して參りまして、三十年前に於てエーベルト及びガフキーと申す二人の學者が出て漸く此窒扶斯の病原を發見することが出來ました。而して其病原は何であるかと言ふと、一種の黴菌であると云ふことが發見されました。其發見せらるゝ時に何處から、其黴菌なるものを取出したかと申すと、患者が死亡した其屍體を解剖して、其患者の腸と腸との間に挾まつて居るところの淋巴腺から取り出したので、其淋巴腺と云ふのは諸君が御經驗がありますか、よく咽喉が腫れると頸の處にグリ〳〵が出來る、手を當てゝ見ると、少し腫れて居つて能く解る、彼れが卽ち淋巴腺であります、デ其腸と腸との間にある、あの様な淋巴腺を切つて見ましたら、一種の黴菌が入つて居つたと云ふことを發見したのであります。夫から淋巴腺ばかりではなく、脾臟と云ふ一の臟器がありまして、其脾臟と云ふのは、何處にあるかと申しますると、背側に附いて居りまして、脊椎より左側でありまして、肋骨の下の處にあります。それで其大さは丁度手の平位で、舌の様な細長い形をして居るものであります。此の臟器の中にも窒扶斯菌が入つて居つたと云ふ事を發見した、それで此淋巴腺と云ふ臟器は、何う云ふ働きをするかと言ふと、丁度腸から消化されて行つたところのものを、其處で檢査する場所で、何んぞ惡いものは入つて居りはしないかと調べて、若し惡いものがあれば、其處で抑へ留めやうと云ふ一の巡査の派出所、卽ち交番と云ふやうな所である。もう一つ淋巴腺のお役は、腸から吸收されて來たところの物、卽ち乳糜の如き、まだ粗製物であるものを、其處でモウ一度精製し直して、さうして人間の體の成分に近く拵え直す働きをするものが淋巴腺であります。其淋巴腺の所に窒扶斯菌が這入つて來ると、其處を通つてはいかぬと言つて、交番で抑へつける、けれども窒扶斯菌は小さくなつて居らない、其處で威張つて〳〵交番でも困つて居る、斯う云ふ惡いもので窒扶斯の病原がある

と云ふことを發見したのであります。

次に又脾臟と云ふのは何う云ふ働きをするかと云ふと、脾臟と云ふものは、云はゞ淋巴腺の親方で、其處では種々な働きをして居る、例へば出入の血液を調べる税關とか、或は先日お話をした赤血球や白血球を製造又は適當に出し入れをする大藏省とか、內務省とか云ふやうなお役目を此の脾臟でして居る。然るに其脾臟へ來ても亦窒扶斯菌が繁殖して居つたと云ふことが發見されたのであります、是は三十年以前に漸く分つたのであります。

夫から此黴菌と云ふものは、どんなものであるかと云ふと、それは例へ方の無い程の小さなものでありまして、西洋の尺度で申しますと零・五ミクロンと云ふ小さいものであります。之を日本の尺度に直しますと、一分の四分の一卽ち二厘五毛を夫を又千分して、其一つをモウ一遍半分に分けた所のものであつて、それ位微細なものでありますから、顯微鏡でなければ判然分らぬ。例へば髮の毛に比較して見ると、其髮の毛の直徑の三百分の一に當るほどの細さなものでありますから、若し又此髮の毛程の穴があれば、此窒扶斯菌が何疋揃つて這入るかと云ふと、三百の自乘卽ち九萬疋も揃つて優に入ることが出來ます、其標本は此處に御座いますから、後で御覽を願ひます。

髮の毛と黴菌を竝べて置いて見ました所が、丁度髮の毛一本が松の大木であれば、それに對する所の此黴菌は、蟻か胡麻粒のやうになつて見へて居りますそれは非常な差であります。それであるから其樣な小さな黴菌がなか／＼怪しからぬ惡いことをするとは思はれぬ程であります(標本を示す)。是は窒扶斯菌が髮の毛に附いて居つたのではなく、培養して置いた所の黴菌を硝子の板に擦付けて、赤く染めて置いて、其上へ髮の毛を置いて見たのであります。

扨て又窒扶斯菌の形狀は何う云ふ形狀であるかと言ふと、少し長細い棒のやうな丁度飴棒の樣なものを角を圓くした樣な、或は示指の二節位の格好をし

て居るのです。さうして夫は足が生へて居る、八本乃至十二本の足を有つて居るもので、章魚には足が八本と言つて居るが、黴菌の足の方が多いのであります。章魚の足は頭の處から生へて居りますが、黴菌の足は其周圍に生へて居ります、それを動かして盛んに泳いで歩くものであります。其速力は非常に早いものでありまして、それを水の中へ入れて見ますと、何時までも生きて居つて、金魚よりもまだ割合に早く泳いで居ります。さうして是は種々な色で染分けをすることが出來る、赤い色に染分けをすることが出來る、赤い色に染めると赤くなつて仕舞ふ、それの泳ぐ所を見やうとするには、水に泳がして置いて、顯微の裝置を利用し、強い光線を小な孔より入れ、其の光に當てゝ見ると、キラ〳〵動いて見えるのであります、丁度隙間より漏れ入る光線で空中の塵埃がキラ〳〵見ゆる樣であります。

（以下次號）

月經の話（承前）

醫學士　河島右一

次に月經閉止前後の養生法に就て御話を致しまする即ち四十四五乃至五十歳の方の御養生であります。夫れは此の時代になりますと、月經が漸次其量が減つて來る、さうして每月あつたものが無くて濟むやうになり、漸々減つて來るのが普通であります、さうして終には全く無くなつて仕舞ふ。是も健康な方になると何の異狀もなく三十年間の月經期を終る方もありますが、大抵此月經閉止期に於ては特別の症狀を受け、お苦みになる方が多いやうであります。夫れはどう云ふ時に來るか、此月經閉止頃になると大抵の方が二回三回四回と云ふ多數の妊娠、分娩の經過をされて、非常に身體が疲れてお出でる時であつて、身體に非常に隙があるから病氣に罹り易いのであります。夫れで自然色々な病氣の原因を惹起す事になつて、頭を非常に使へば頭の方に病氣が起つ

て來る、足を使へば足の方の病氣を起して來ると云ふ如くに、各部に隙があるから、其の隙に向つて種種症狀を起して來るのでありますが、此の時代に一番多いのは神經症狀である、神經的症狀が起つて、氣分が惡くて不快な日を送ると云ふ方が澤山あるのであります。其の他神經の關係から僂麻質斯に罹り易い、或は神經痛に惱むとか、其他是までは知らなかつたけれども頭痛がする、或は肩が凝る、動氣がする、或は身體が腫れると云ふやうな、色々な症狀を起して來るのであります、で此の月經が漸次的に少くなつて來ると云ふならば大變良いのでありますが、夫れが爲めに、是まで一週間あつたものが急に二日になつて來て、それが或る時期の間、半年も續いたと云ふやうな事がある、夫れも決して宜い現象ではない。諸機關の退降する順序は漸々に退降するものである、それが急に退降して來たと云ふのは、何か異狀があるのではないかと云ふ事を、自分も覺らなければならぬのであります。又夫れと反對に、

月經が減らないで殖えて來た、是も亦一の異例で、餘程注意をしなければならぬのであります。兎に角妊娠を經、分娩を經ました後には、腹部は弛緩して來るのが當り前であるのに、月經閉止期になつて腹が普通より大きくなつて來たと云ふことは、妊娠は別として餘程注意をしなければなりませぬ現象であります。月經が少くなつて急に腹が大きくなつて來たと云ふやうな場合があつたならば、十分な診斷をしなければ分らぬけれどもが、卵巢囊腫ではなからうかと云ふ考を懷かなければなりませぬ。夫れから月經の量が殖えて來て、腹が大きくなつて來たならば、子宮筋腫と云ふやうな病氣ではなからうかと自分で想像しなければならぬものであらうかと思ふ。玆に一例を擧けて申しまするど、五十になる方があつた。夫れは東京の人でなく田舍の人である、今より十年位前から月經が漸次殖えて來た、是までは五日あつたのが、一週間になり、十日になると云ふやうに、漸々殖えて來た、所で是は止るのに近いて來た

爲めに斯様に殖えて來るのかも知れないと思つて、氣にも留めずに其の儘に放つて置いた、けれども身體が漸々肥えて來たが、是は地腹が大きいのだと云ふので經過して居つたのでございます。所が五十歳の暮になつて、非常に喘息のやうな發作がやつて來た、さうして全身に浮腫が起つて來た。何うも是は棄て置けぬと云つて、東京に出て診て貰ふことになつた。是を見ると、外から相當に見えて居る、別症狀としては、非常に腹部が膨滿して居つて、子宮に一種の筋腫があつた。其の大さは丁度八月位な胎兒の頭の大さになつて居るのであります。是は筋腫であるから、早速手術をしなければならぬと云ふことで、手術に著手したのでありますが、幸福にも手術が良い工合に行つて、生命が助つたと云ふ人があります。是等は月經の狀態を十分に熟知せず、腹部の膨滿を十分に觀察しなかつた結果として、既に十年も前からさう云ふ經過があつたのに、今日初めて五十歳の時になつて腹を切つたと云ふことになつたのであるなら、餘程此の邊には注意しなければならぬのであります。夫れで此の五十歳後、月經閉止期になりましてからの養生法と申しますると、月經なくなつて仕舞ひましてから、其の時代は外の時代と違つて、西洋では處女に歸ると云ふ言葉を使つて居りますが、是まで痩せて居つた人が漸々肥えて來て、殆ど娘さん方と肩を比べられる位に肥る方がある。此の時代に於て最も注意しなければならぬことがある、夫れは月經閉止後に復た月經を見ると云ふ事がある、何故注意しなければならぬかと云ふと、月經閉止後に月經を見ると云ふのは、月經ではなくして子宮の出血である、是は病氣である、何う云ふ病氣であるかと云ふと、此の原因療法等に就ては今研究中ではあるが、一種の癌腫だと云ふのである。此の癌腫と云ふものは、早期に發見すれば根治する事も出來るが、期が遲れると生命をも奪はれるやうな事になるのであるから、月經閉止後に出血を見たならば、直に醫者に驅付けて診斷を乞ふて、その處置を

して貰ふと云ふやうに、年をとつた方の御注意が一番であらうと思ひます。先づ是が一般幼女の時から、ずつと終りまでの月經の大體であります。

終りに臨みまして寒い時の養生法に就いて一寸一端を申上げて御免を蒙らうと思ひます。寒氣即ち冬期に於ては、皆樣も大にお苦みでございませうが、冷えると云ふ事があります。是が一番御婦人方に取つて大敵で、又最も用心をしなければならぬことであります。此の冬期に冷えると云ふ事に對しては、其の弊害として、所謂粘膜刺戟を起す。又粘膜に障害を起して鼻加答兒、咽喉加答兒、尿道加答兒等を起し、又肛門が悪くなる、或は子宮の粘膜を冒す、是等は冷ると云ふことが影響するやうであります。又腸の粘膜を冒すと下利を起すと云ふことになりますし、それから又冷えると云ふ、寒いと云ふ爲めに運動不足になるので便秘が起ります。斯う云ふ風な色色な病狀が冷えると云ふことから起りますから、冷えると云ふことに就ては、十分に注意することが必要であります。それにはどうしたら宜からうと云ふと、是は私の考では、色々な方法もございませうが、簡單に行へる一番主なる點を申上げますと、普通誰でも冷える時には著物を著る、卷物をすると云ふことは分つて居りますから、別に申上げるまでもありませぬが、茲に御注文を申上げたいことは、非常に寒い場合には、腰湯をして頂きたい、是れが私の望みであります。全身浴も成る程能く温りますけれども、夫れよりか寧ろ腰湯をした方が宜い。腰湯はどう云ふ風にしたら宜いかと云ふと、是も色々ありまして、鹽湯で腰湯をする人もある、或は芥子を入れてやる人もあり、大根の葉の干したのを入れてそれでする人もあります、艾を煎じて腰湯する人もありますが、一番其の中で簡單で良いのは鹽湯であらうと思ふ。鹽湯はどう云ふ風にして腰湯をしたら宜いかと云ふて、先づ普通の盥一杯に湯を容れて、夫れに鹽を三合位入れて腰温をするのが宜い、尤も其の腰湯をする湯を拵へるには、初め鹽を入れて其

次に湯を容れる方が利目が宜いのであります、夫れには御注意をなすつたら宜からうと思ふ。先づ此冷えると云ふことに就ては、腰湯政策を御注文申したいと思ひます、次にお願ひ出したい事は、斯く種々月經の事に就てお話を致しましたから、月經の場合は御婦人に取つて重要なる事、又最も大切なることとお解りになつたらうと思ひますが、それに就きまして、月經の經過は如何なるものであるかと云ふことをお考になる事が必要だらうと思ひます。今月は斯う、先月は斯うである、先月と比べて今月は斯うであると云ふ比較をお取りになつて、異狀があるや否やと云ふことを御覽になつて、異狀を認めたならば、直に其の病氣を豫防なさると云ふことが必要であらうと思ふ。世間では育兒日誌とか當用日誌とか云ふものがありますが、私は皆さんにお勸め申したいのは、皆さんは月經日誌をお拵へになつたら宜からう。是はどう云ふ譯であるかと云ふと、私が或る患家に參りまして、妊娠六ケ月の方でありましたが何時が最終の月經であつたかと聞きました所が、一寸お待ち下さい、確かに覺えては居りますけれども、詳しい御話をすると言つて、奥から一ツの手帳を持つてお出でになつたのです、それは普通の當用日記で、夫れを繰返して御覽になると、其の中には、月經のあつた時が赤い字、赤いインキで書いてある、何日から何日まであつて、どう云ふ工合で、量はどうあると云ふことが詳しく書いてあります、夫れを見て六ケ月は斯う、五ケ月は斯うであつたと云ふて六ケ月間の毎月の月經時に於ける狀態、其の月經の容態を委しく御話になつたので、私も大變に過去の經過を知るに便利を得て、妊娠の判斷を與へることが出來た例があります。是は確かに善い事で、斯の如く月經に注意を拂はれたと云ふことは結構である殊に妊娠と云ふことに對しては、どうかすると最終の月經を半年も前のことを繰返さなければならぬやうなことがあつて、往々間違が起る、それで私は斯うしたら大變宜からうと云ふことを考へたのであり

ます。何うぞ皆さんも一つ育兒日誌、當用日誌の中に、赤くなくても宜い、普通の字でも宜いから、月經の狀態、日數、期間、其の量及び其時の症狀等を詳しく書いて、後日になつて、自分の身體は果して完全であるや否やと云ふことを御研究になつて、若も少しでも異狀があつたならば、直に愧ることなく御相談なすつて、未來の幸福を增すやうになさるのが必要と思ひますので、茲に月經日誌と云ふものをお勸め申した次第であります。

（完）

叢談

汗の色々

人の身體を保つには、飲食物を取入れて全身を養はなければならぬが、その飲食物が悉く身に成つて了ふ譯でないから、一方に於てはその用ひ盡した榮養物の滓・詳く言へば頽廢物を排泄しなければなりません、丁度彼の汽車を働かすには石炭を焚かなければならぬが、その石炭の燃滓は棄てねばならぬと同樣であります、汽車では石炭の燃滓を棄てる外、時々機關車の下の方から蒸氣を拔き、又時々汽笛を鳴らす爲に息を吹き煙突からは常に煙を吹いて居ります、これを人體に譬ふれば、大便、小便、呼吸及び汗等の所謂排泄物であります、若しこの働が無かつたならば、蒸氣鑵は破れて汽車は動かなくなる、人體ならば便祕、尿閉、窒息、中毒で死で了ふ、飲食物攝取の必要であると同時に、老廢物の排泄も亦斯樣に緊要である、その排泄は如何にして出來るかと云ふに、腸より糞便として、排泄し、腎臓より尿として排泄し、呼吸に依て肺より、發汗によりて皮膚より排泄するのであります。斯樣に種々排泄の道がありますが、常には餘り氣がつかぬけれども、これから夏になつて特に著しく感ぜらるゝものは汗の分泌であります、依てこの汗のことについて少しくお

話を致して見やうと思ふのであります。

御承知の通り皮膚には無數の分泌腺が御座いまして、その中に皮脂腺と、汗腺との二つがあつて、皮脂腺は脂を分泌し、汗腺から汗を分泌するのであります。この汗腺と申しますものは、管のやうな形をして居るものでありまして、その本の處は、もつれて木の根の塊のやうになつて居ります、而してこれが皮膚の中に植え込まれて居つて、その汗の出る道は、丁度コルク拔きのやうに捻れて居るのであります。

偖てこの汗腺から分泌される所の汗は如何なるものかと申しますと、無色で少しく濁つた液體で、鹽氣を含み、一種の臭があります。その成分を調べて見ますると、少量の有機物と無機物が溶けて居りまして、顯微鏡で見れば、小さな表皮の片や脂肪の顆粒などが混ざつて居ります。

汗は何うして分泌されるかと云へば、一言に云へば神經の作用で分泌されるのであります。元來皮膚から分泌されるものゝ總量を計つて見ますると體重の六十七分の一で、肺から排泄されるものゝ二倍に當つて居ると申すことであります。健康の狀態では、汗は絶へず分泌して居るのであるけれども、出るあとからずん／＼蒸發して了ふので目には見えないのであります。しかし種々の條件に出て一時に蒸發し切れなくなると、初めて所謂汗ばむで、皮膚上に珠を成し、大袈裟に形容すると瀧の如く途に流れるやうになるのであります。その條件を數へ上げて見れば、略ぼ次の様な事柄であります。

第一　身體周圍の溫度高きこと。
第二　血液の中の水分多くなること。
第三　心臟と血管の働が盛になること。
第四　蒸發を妨げられること。
第五　發汗劑を用ゐたる場合。

盛に煖爐を焚いた室、汽車、汽船の機關室、鍛冶工場等で汗の出るのは第一の條件に基づくのである、夏汗の出るのも主としてこれに出るのであります、

湯水を澤山飲み、殊に温い饂飩や蕎麥を食べて汗の多く出るのは主として第二の條件に由り、烈しく運動した時に出るのは第三の條件が原因で、毛布やフラネルで身體を包んだ時に汗の出るのは第四の事が原因で、夏の蒸暑い時に盛に出るのは、第一の條件と此の第四の條件が共同して汗を多くするのでありまして、第五の條件は即ちピロカルピンと云ふ藥を注射し、又はサリシール酸の類を飲だ時の如きであります。尚ほ汗の分泌と尿や糞便の排泄とは、恰も天秤か、ハネツルベのやうな關係がありまして、一方が多く出れば、一方はそれに準じて少なくなる、乃はち夏汗が澤山出る時には尿の出方が少なくなり、これと反對に冬汗の少い時には尿の排泄が多くなる、又下痢すれば皮膚の枯燥するのもこの譯であります。

又前にも申しました通り、汗の分泌作用は神經の司る所でありまして、その汗を出さす神經の大本、即ち發汗中樞は脊髓の中に在るのでありまして、窒息するやうな場合に血液が惡るくなりますると、その刺戟で以て汗を出します、人の死ぬる時に汗を出すのは、苦みの爲に出ると云はむよりは寧ろこの中樞の刺戟される爲であらうと思はれます。且つ發汗神經と血管の神經とは獨立のものでありますけれども、大抵同時に興奮するのが常でありまして、それで發汗する時には大概皮膚が紅くなるものであります、又非常に痛い時や、病氣の時に顏が蒼くなつて汗をかくことがありますがこれも畢竟血管の神經と發汗神經が同時に働くのでありまして、只前の場合は血管が擴がり、此場合には縮むのであります。尚ほ脊髓の中樞が、直接或は反射的に興奮するばかりでなく、大腦の方からも亦血管神經や發汗神經に直接の影響を及ぼします、彼の何か失策をして大に恐れ入つた時や、甚しく氣遣したり、非常にきまりの惡るい時などに、顏が赤くなつて、汗顏の至りとか云ふて頭を押へるやうな場合の、その汗顏が即ちこれであります、又背汗淋漓と云ふ、その背中の汗も

これに由て出るのであります。

次に汗の分泌の病的の場合を簡單に申して見ますれば先づ多汗症と云ふて、前に述べた樣な特別の條件に由て一時汗が多く出るのではなく、常に發汗の多過ぎるものがあります、又これとは反對に、無汗症又は少汗症と云ふて、汗の出方が普通よりも少ないのや全く出ないのがあります、尤も汗の多い少いは、先天性にそのうまれつきにもよりますが、茲に云ふのは、その甚しいもの、又は全く一種の病氣に由るものであります。而してこの多汗症や少汗症の中にも全身のものもあれば、或は一部分だけ汗の多く出るものもある、卽ちその局處の多汗症の中では、手掌多汗症卽ち俗に油手、又足蹠多汗症卽ち油足などは最も多いもので、次には腋窩多汗症、その他鼻の頭に特別に多く汗の出るのもあれば、額から多く出るのもあり、臀部に多いのもあります、その他臭汗症と云ふて特にいやな臭のする汗の出るのもあり尿の成分が多く汗に出て來る所の尿汗症と云ふものがあり、色汗症と申して赤色や、最も多いのは靑色の汗を出すのがあり、甚しいのは血汗症と云ふて全く血液が汗となつて出るやうなものもあつて、數へ立てれば稀ではあるが隨分奇妙な汗が色々あるものであります、此等のものについて今一々說明する譯には參りませんから、只斯樣なものがあると云ふことだけに止めまして、次に多汗症に對する手當を簡單に申述べて、夏期衞生の一助として御參考に供します。

結核症、糖尿病、貧血等があつて汗の出る場合の如きは、これは全く醫師の治療に委せなければなりませんが、局所多汗症には單寧一・〇、酒精二〇〇・〇の割合の水藥を、その汗の多い所に一日數回塗つて、サリシール酸一・五、澱粉五・〇、滑石四三・五を混和した粉、又は明礬二分滑石十分の割合に混せた粉藥をつけるのであります、これは何れも西洋の軍隊あたりで賞用される處方でありまして實際效があります、場合に依ては餘り效能の見えないこともありま

せうが、併し決して坊間に於て盛に廣告し吹聴して賣り立る化粧品や賣藥の汗止め藥には劣りません、只賣る物のやうに善い香がつけてないのと値段が高くないのと、其成分が明かで怪しい物が混じつてないだけが異つて居ります。其他にも幾らも處方はありますが、普通は以上の粉藥で澤山であらうと思ひます、若し好い香をつけやうと云ふならば、これに何なりと自分の好む芳香藥を加へて差支ないが、左樣なものはなるべく混ぜないで、別に香水なり香油なりを用ゐた方が善いのであります。尚ほ一言注意しなければなりませんことは、此等の藥をつける前には、一度熱い湯をタオールに浸して、それを固くしぼつて、顏でも、腋窩でも、汗の多く出る處に暫時あてゝ、其處の汗や脂を拭き取つて後に藥粉を撒布することであります、衞生上清潔と云ふことは何時でも第一の條件でありますが、特に皮膚の衞生に於ては、これを怠つては、いくら妙藥を浴びても其效がないものであると云ふことを承知して居られたいものであります。

日にやけぬ法

追々暑くなるに隨つて、御婦人方の一の心配は『日にやける』といふことであります、色の白きは七難をかくすとかいふ諺もあることなれば、色の白いのは甚だ良いものでありますけれども、ものごとは適當であつて、その度を過たないのが、一番良いのであります、雪はあくまでも白いのが綺麗でありますけれども、墨はあくまで黒くなくてはいけません、大體人間といふものは赤い色の筋肉の上を、皮膚で包まれてゐるものでありますが、その皮膚には色素があつて、人種々々に依てそれ〴〵幾分かの色合を持つてゐるものであります、外國人の内でも韓國人や、清國人は日本人とあまり色に變りはありませんが、一山越へて歐羅巴に這入りますと人間の皮膚の色は大變白く美しくなつて參ります、ところが印度

や亞弗利加に行きますと、思ひ切つて、色が黑くなつて、日本人の眼から見ると甚だ醜いやうに見えますけれども、印度人や亞弗利加人などは、この黑光りのする色を尊んで美しいとしてゐるのであります、人間の美といふものは天然の美の力に依つて出來てゐるものであつて、もしこの天然の力に逆ふやうなことをすれば、眞の美といふものは、顯はれないのであります、このことが世間の婦女の頭に這入つて來たために、近頃は白粉をつけるだけが、化粧法の奥義ではなく、人間自然の色合を顯はすがために、白粉の下に紅色の化粧劑を用いたり、またはときいろの白粉なども使用せらるゝやうになつて來たのであります、そして實際に見たところでも眞白な色よりも、紅味を帶びた自然色のはうが、餘程綺麗であります。

さてそれならば皮膚の自然の色といふものは、どんな色であるかといふと、日本人ならば薄い黄褐色であるので韓國人や淸國人と同樣であります、その色合は何であつて、どんな作用があるものであるかといふことを知ると、夏に成つて日にやけるといふことは、少しも嫌ふべきことではないといふことが判ります。人間の皮膚の色はメラニンといふ色素で出來てゐるものであつて、母斑はメラニンの塊であります、メラニンといふものは、血液の內のヘモグロビンといふものからできるのでありますから、決して惡むべきものでありません、色の黑いといふのはメラニンが澤山あるといふことであつて、夏日にやけるといふのも、メラニンが澤山出來るといふことであります、それならなぜ夏になるとメラニンが增へるかといふと、それには立派な理由があるもので決して意地惡く黑くなるのではありません。

太陽は光線と溫線とを放射して、地球の表面を照らしてゐるものでありますが、その內で溫線の方は太陽から地球に來る間に、空氣中に吸收せられて始めの溫度よりは非常に冷たくなつてゐるのでありますから、地球が太陽に近づけば、溫線が地球の表面に

くる分量は段々と增へてくるものであります、夏は全く地球と太陽との間が近くなつてゐるのでありますから、日光の內の溫線は大變增加してゐるのであります、光線のはうはあまり空氣中で吸收されないものでありますが、太陽に近づくに隨つて光線の分量の增へてくることは勿論のことであります、だから夏になれば光線も溫線も共に增へてゐます、ところが皮膚といふものは、極く弱いものであつて、あまり強い日光に照らされると、直ぐに火傷を起すものであります、それは日常吾々が實驗していることで、天氣の良い日に傘なしに野原で一日遊んでくると、顏や手などの色が赤く黑くなると同時に項の所がぴり／＼痛んで頂度爛たやうになります、これは日光のために輕い火傷をしたのであります、また夏に海水浴に行つて、襦袢を著ないで海濱に遊んでゐますと、背の皮膚は爛て水疱ができることがあります、これは背の皮膚が火傷を受けたのであります、ところが顏や手などには決してそんなものはできないで、只ひどいときにはぴり／＼痛む位であります、それはどういふ理由かといふと、先づ顏や手と背とを比べて見ると思ひ當ることがあります、それはなにかといふと、背の皮膚は顏や手などの皮膚よりは、色も白く軟かであります、これが火傷を受けやすい原因であります、そしてなぜ背の皮膚は色が白いかといへば、メラニンが少いからでありますが、さうすればメラニンが火傷を防ぐ作用があるのではないかと思はれます、實際顏や手などの火傷しないのは、メラニンが多いからであります、このメラニンといふものは、大變光線を好くものでありますから、日光にあたり易い所には始終澤山集つてゐるもので、顏や手などの色が黑いといふのは、始終日光に照らされてゐるために、メラニンが澤山集まつてゐるためであります、このメラニンといふものは強い日光と戰つて皮膚を保護するといふ作用があるのでありますから、若しメラニンが集つてこなかつたら、夏などは顏といはず手といはず、日に照ら

される所にはどこにもかしこにも、水疱が出來て、頂皮癩病やみのやうになつて了ふでしよう、併し幸にもメラニンがあるために吾々はそんなひどい目に會はないですむのであります、それ故夏に日にやけるといふことは、決して嫌ふべきことではないので、身體の自然の作用であるのです、若し日にやけることを嫌つて日にあたらないやうにしてゐると皮膚にはメラニンが少くなつて、色は生白くなつてきますけれども、血の氣はなくなつて、大變弱くなつてくるものであります。

右申すやうな次第でありますから、色の黑くなることは決して心配するには及ばないことで、秋になり冬になつて行くと、夏の內に附いてゐた色は段々とはげてきて、また元の通りの色になるものであります、併し生來色の黑い人は、冬になつても決してはげるものではありません、これは皮膚の內のメラニンが生來性に多いのでありますから、如何に化粧をこらしても駄目であります。

そして夏にやけた色がはげてくるには、早い人もあれば遲いひともありますが、早くはげさせやうとするのには皮膚の血液循環を盛にして、皮膚を健康にして置くことが肝腎であります。皮膚を健康にするといふことは、これは化粧法の第一番の條件でありますが、このことは三月の本誌に美容法といふ題で詳しく述べてありますから、皆樣はすでに御承知のことであろふと思ひます。

かく述べて見れば、日にやけぬ法といふのは、つまり皮膚を健康にするといふのと同じことであるといふことが判ります。

（終）

乳房の話（承前）

乳癌

乳腺の腫瘍の中で最も多く、又最も恐るべきものは癌腫卽ち乳癌である。今日の世の中になつても、この乳癌の爲めに生命を取られる婦人は頗る多い、こ

れは畢竟適當な時期に手術を受けないからで、實に殘念な譯である。乳癌と云へば、誰でもその恐ろしい名を知らぬものはない程であるが、矢張知り顏にして知らぬからで、みす〳〵これが爲に殺されるのは如何にも遺憾である。

乳腺の腫瘍と云へば、百の中で八十はこの乳癌である、所がこの恐るべき腫瘍も、初の間は單に乳房の中に硬いものが出來るだけで、別に痛も何もないことが多いので、兎角等閑にして置かれる、而して居る間に、これが皮膚と癒著して乳嘴が引込むやうになる、斯樣な初期の狀態では、病はまだ其部分だけに限られて居るので、外科手術に依て完全に治ほすことが出來る、然るに前にも云ふ通り、始めの中は殆ど痛もないのであるから、その小さなぐり〳〵位は放置て、そのまゝにして居るのである、さうかうして居る間に、このぐり〳〵が段々大きくなつて、腋窩にも出來て來る、これは癌腫が既に淋巴管を傳つて腋窩へ分家したのである、又これと同樣に鎖骨の上の窩の所にも分家すると云ふ譯で、芋の蔓を傳つて生ずる如くに殖え、尙は血液の道に依て飛離れた所にもこの腫瘍が出來て、同じやうに大きくなる斯うなつてからは、もはや如何とも致方がない、その爲に漸次身體が衰へて、腫瘍は皮膚を腐らし、益々大きくなり、幾度手術を施して見ても又直に再發する、遂に斃れて了ふのが運命である。

乳癌の原因は、今日の所まだ明かになつて居らぬが年は四十歲から五十歲の婦人に最も多く發するもので、以前に乳房に外傷を被むつたことがあるとか、又炎症を起したとか云ふことが誘因となり、又月經、妊娠、授乳なども乳癌發生に關係があるもので、男よりも女の方が遙に多い、女の乳癌百について男の乳癌は一つの割合である、尙ほ遺傳の關係もあると云はれて居るが、併し何も以上の原因も誘因もなくして發生するのが澤山ある。

乳癌の療法は全く外科手術に依るより外は仕方がない。然るに斯樣な惡性の腫瘍に對しても、世の中に

は種々樣々なる俗療法を行ふものがあつて、大切の時期を失つて、取返しのつかぬやうにして了ふものが往々ある、否往々位ではない、大概手遲れであるその爲に大抵治癒りきらずして、手術を試みても直ぐ後から再發し、或は初より手をつけずに見殺にした方がましと云ふやうな場合が多いのである。幾度も繰返して云ふが、乳癌であつても、初の中ならば完全に治癒することが出來るものである。しかし少し手遲れになつては、かまはずに置けば二十ケ月位で死亡して了ひ、手術を施した所でそれよりも七八ケ月長生する位のものである、尤も乳癌にも亦種々の性質を異にして居るものがあつて、極稀には五年或は十年も保つやうなものも無いではないが、性質の惡いものになると、半年位で死で了ふのもある。概して軟いものが硬いものよりも性質が惡くつて、速に大きくなるものである。その腋窩の淋巴腺を侵して來るのは、發病後どの位の後かと云ふに、平均十四五ケ月の後としてあるが、まだ〳〵早くから侵して來ることが多い、且つ外から觸れることも見ることも出來ない身體の內部に轉移症を發するのはその時期を定めることが出來ない。乳癌にはこの轉移症と云ふことがあるので困まるのである。何はともあれ、極最初に診斷がついて、直ぐ手術してその病根を取つて了へば治癒する、而して手術後一年を經て、その乳腺にも腋窩にも再發せざれば先づ全治したもので、三年間再發しなければ永久に治癒したものと云ふことが出來るのである。

尙ほ一言して置くべきことは、斯樣な惡性の腫瘍になると、色々の手療治をしたり、又家傳とか祕方とか何々療治とか、稱して刺戟を加へれば、非常な勢で增惡することも必定である。これは決して呪禁や何かで治癒るべき筈のものでない、又乳一切の妙藥等でも、とても治癒るきづかひはない。日本でも西洋でも同樣、兎角婦人には迷信が多く、又一つには手術するのが厭さにぐづ〳〵して手遲れになる。外科學の方は非常に進步して居るにも係らず、乳癌

で死亡する婦人の相變らず驚く程多いと云ふのは、全くこの爲めであるから、若し四十歳以上の婦人で乳腺の内に漸次硬い腫瘍が出來たならば、假令痛がなくとも、色々の事をして時日を費さずに、早速醫師の診斷を乞ふべきである。前にも云ふ通り乳癌の初は痛のないのが普通である、殊にこれは又皮膚と癒著し易いものであるから、その他のシコリのやうに内で動き廻らない、而して乳嘴が引込れて陷沒し後になれば腋窩の淋巴腺が硬くなる、斯樣になればその乳癌であることは最早殆ど疑がない、家の都合とか、何とか云ふべき場合でない、直樣手術しなければならない。腋窩の淋巴腺に移つては、既に一歩遲れて居るのであるから、左樣のものゝ發生を見ない中に、醫師が手術を勸めたならば、直ちに思切つて十分の治療をすることが必要である。今日では麻醉藥を應用して殆ど痛を知らずに手術を受けることが出來、且つ初期の中なれば手術も容易で、完全に出來るのである。玆に繰返して言ふ、乳癌も初期の中ならば、完全に治癒するものであることを。

（完）

活ける家（承前）

（三四）活ける家の美（下）

身體の身振り態度も、亦た夫れ〳〵の思想感情を表はすものであります、學者の云ふところによれば『言語で云ひ表はされるあらゆる思想感情は必ず擧動や態度でも表示さるべき筈のもの』であるさうであります。

無言劇、默劇、里神樂などではその全體の物語りや仕組みが、一言半句の言葉も無くて、只擧作身振りなどばかりで表はされるものであります。我國の所謂舊劇に於ても其所作と云ふものが、如何ばかり人生の祕奧を語るかは、觀る者の心の緒琴が、これによりて打ち鳴らさるゝに徵してもわかるのであります。幾十年、幾百年の古昔に刻まれたと云ふ彫

像若しくは銅像は、生活體のやうな擧作運動の力のない死物ではありますが、尙ほ能く之を凝視すれば悲しい、嬉しい、勇ましい、活ける往時の物語りの到底盡きぬものがあります。

身振り手つき(ジエスチユーア)

は演說者の利刀で、滿堂の聽衆を振撼して己れの說に靡かしむるに偉大の力あるものであります。慷慨悲憤の演說も言語ばかりでは、何うして聽衆の頭腦に響きませう。手の卓を叩くあり、足の牀板を蹈み鳴らすあり、軀幹の敏活に動くあり、顏貌に於ける表情の之を助くるあるによつて、こゝに始めて生氣と活氣とを帶ひ、聽衆を心服せしむるものであります。

人體の美は又頭の形狀と、顏に於ける各部分の釣り合ひ……眉毛の曲形と、鼻の恰好と、口の大小形狀と、頰や頸の圓み加減と、頭が肩に座つて居る具合……とに關係することの頗る大いなるものであります。就中、顏面は感情の變化によりて或は天女の如く美しく、或は夜叉の如く恐ろしくなるものでありますれば、吾々は絕へず精神を平穩に有つてゐて、假りにも强き感情の絆を取りはなさぬやうにしなければなりません。世に正體もなく、前後を取り亂したほど醜きものはありません。所謂

婦人の嗜み

とは此意味に於ても必要なものであります。

斯の如く態度身振とは聲なき言葉と同樣に、內心を外表に發表すると同時に、身體に一部の美を添へるものでありますが、時と場所とによりて變化し、人によりても異るべきは云ふ迄もありません。たとへば悲痛の時の態度は陰沈の調を帶び、歡喜の時のヂエスチユーアは輕妙のところがなければなりません。衆人が聞て、隨喜の涙を流すやうな牧師僧侶の說敎も、小兒が之を眞似る時には寧ろ滑稽の極であります。

色の白きは七難をかくす

と申しますが、色の黑白は身體の美を增すこと著し

いものであります。而して人體の色には調和があり統一があつて、眼の色、髮の色、眉の色、皮膚の色すべて夫れ〳〵の符合と意味とを有つて居ります。是等の色を見て誰か其人に於ける氣質の良惡と、趣味の高下と、人格の優劣と、身體の健否とを判斷することが出來なからう。骨骼の頑丈な、鬼をも取りひしぐ樣な人を御覽なさい、如何に其黑い色の中に澤があり、光があるではありませぬか。世の戰ひに倦み疲れた憐れな人を御覽なさい、如何に其眼は鈍乎として力がなく、其色は蒼白くして生氣が無いではありませぬか。

　顏の色は感情によりて變る

嬉れしい時は頰に薔薇の淡色が點し、恥かしい時は滿面紅葉の濃き色を散らし、怒れる時は額の靜脈が溢つて暗赤い顏色となり、驚く時は血管が急に縮小して蒼白になり、絕望の時は活氣が失せて顏色が土の如くにかはります。得意の人を御覽なさい、失意の人を御覽なさい、順境にあつて威力に誇る人を御覽なさい、逆境に沈淪して零落を呻吟する人を御覽なさい、而してその間に如何ばかり顏色の差異があるかを御覽なさい。然かしながら

　色は各人に相應して與へられてある

ものであります。嬰兒の色が如何に愛らしいとは申しながら、之が大人の色であつては至つて醜く、軍人の色が如何に勇ましいからと云つて、之が妙齡婦人の色であつては其美を損することの甚だ少なからぬものであります。世は公平に、自然に私しなしとは斯かることを意味するもので、『諸共に一味の雨』に浴しながら、『柳はみどり、花はくれない』と云ふのも、柳はみどりに相應しく、花は紅に適して居るからであります。ラスキン氏は

　『色の價値は評價し難いほど貴い』

ものであると云ひ、又左の如く云ふて居ります。

『碧空から綠りの色を去り、日光から黃金の色を去り、木の葉から靑藍の色を去り、人の命の血液から眞紅の色を去り、頰からローズの色を去り、眼

から黒き色を去り、髪から綠りの色澤を去れば、世は果して何うなることか。たとひ須臾の間でも無色の白い人間が、無色の世界に住まうのを見たらば、誰れしも色に負ふところの大いなるを感ずるであらう。自然が人に賦與へたる賜物のうち、色は最も神聖な、最も潔き、且つ最も森嚴なるものである。……サレバ最も純潔なる、且つ最も森嚴なる心の人は、色を愛すること最も多きものである」

と。老若男女の別ちなく、凡そ人として美を愛さぬものはありませぬ、而して色は美に缺く可からざる一要素であります。美しき色を得んが爲めには、多くの人の、憂き身をやつすところでありますが、斯くして得た美しい色は裝飾若くは化粧による人工色で、

眞に美しい天然色

は、獨り健康體に於ける健康なる皮膚にのみあるものであります。而して此健康體は吾人が自然の法則にさからはぬ樣に、心身を處しさへすれば容易に得られるものであります。目鼻の配置がたとへ理想的では無いとしても、健康なる天然色を帶びてゐれば何處となく人を魅するの力、人に尊ばるゝの威を備へて居ります。その上精神が健康高尙であれば、其表情の美も加はり、

健康の美

は茲に一層其光輝を放つものであります。然るに世人が此健康の美、此天然の色を愛せずして、裝飾の美、人工の色を欲するのは、まことや、冠履を顚倒し、本末を誤れるものと稱すべきであります。

精神が美しければ外貌も美しくなる

とは千古の眞理で、動かすことの出來ぬのであります。美術家の言によれば、誰れの顏も左右全く均等なく、鼻は顏の中央に位せず、左右の眼も其大小形狀を異にしてゐるさうであります。然しながら心に高尙なる希望を懷き、胸裏に絕大なる思想を有し、身に他人を利益する計劃を實行する人には、是等の

不等は何等の美を損せぬものであります。哲學者エマーソンの言を藉りて云へば、鼻が曲つてゐやうが無からうが、脚が真直ぐであらうが切斷されてゐやうが、ソンナことには頓著ない。

美は我等の手の中にあります

Beauty lies in our own hand.

要は、こゝろを健全に、平和に、純潔高尚にして、毫も悪念邪想に迷はされず、専ら正道を歩んで、然るのち之に相應しき外貌を得よと云ふにあります。

外貌は内心を映す鏡

であります、下劣野卑なる思想感情もうつれば、高貴純良なる思想感情も映ります。願くば吾人は後者をうつして、外貌に天然美、健康美、純潔美を得たいのであります。

絶美なる構造を有して其中に五千個の大理石像を藏するミランの殿堂、世界の最も完全なる殿堂と稱せられて絶大なる塔宇とゴシック式構造とを有するコロンの堂は、世界漫遊者の共に見て驚嘆するところでありますが、思をめぐらして人體と云へる活ける家の構造と其美とを考ふれば、ミランの堂宇は何であらう、コロンの伽藍も殆ど兒戯に類するのであります。

鼻の話（承前）

鼻の形と人種

以上の外鼻の形は負傷手術の爲め又は生れ乍らにして鼻を缺く者、二つ以上の鼻を有する等種々の畸形があります、一般に申しますれば歐洲人は長く高い鼻をもつて居り、黑人種は短く低い鼻を有して居ります、吾々黄色人種及び銅色人種の鼻は其の中間に位して居ります、ブローカ氏は之れによりて、文明の度の進むに從て鼻は高く長くなるものであつて鼻の形は文明の度の標徴であると申して居ります、我國でも古來の繪畫を見るに、學者、高僧貴族等の鼻は皆高く長いものでありますから、此ブローカ說は

全く難ずる事の出來ない說であります、我等黃色人は大に遺憾とする至であります。

而して此の鼻の形は耳の形と共に古來東洋も西洋も『人相學上』必用なるものとせられて居りまして、以上に申しました外にも種々の傳說が御座います、往時へブライ人の如きは僧を選擇するに鼻形を以て其の採否を決したと申します、支那にては種痘を鼻頭に施した時代もあります、又劓とて鼻をきる事を五刑の一に加へた事もあります、或人種は接吻を鼻に行ふ所もあります、又鼻と鼻とを接して禮とする所もあります、エスキモー人の最上の敬禮は手背を以て鼻頭を摩するのださうであります、其他鼻に附て迷信傳說は一々數へ盡す事が出來ません。

鼻形の矯正

斯く鼻の形は一方には人相の上に大切であるものと認められて居り、又一方には美貌上其の美が必用でありますからして、鼻の形を理想的美ならしめんと古から人は勉めました、而し鼻の下の半分は軟骨で出來て居りますから其目的の一部は自然に達せられたのであります、卽ち一日に幾度となく鏡に對して自ら鼻の形を矯正する時は、知らず〳〵の間に鼻の形は多少よくなるものであります、我國では古よりの風習として親が其愛兒の鼻を撮みて高かれ〳〵といふのも、實は之れに外ならぬのであります、鼻の幅の廣いのや、低いのは斯くの如く繰り返す時は長年月の中には幾分は確かに形よくなるものであります。

近來醫學の進步は斯かる遲々たる事には滿足する事が出來ません、が鞍鼻の如きものにありてはいくら勉強して鼻を高くしやうと撮みましても、高くなるものではありません、そして近來は『整鼻術』及『造鼻術』といふものが發見されて、鼻のない人、鼻の醜い人に大なる福音を傳へました、其れは植皮術及びパラフキン注射であります。

植皮術

植皮術と申しますのは鼻の缺けた人や、鼻梁に穴の

あいた人に人工的に鼻を作り、又は其穴を塞ぐ爲めに施すものでありまして、額或は頰の皮膚を取りてそれを折りかへして鼻の形にして、穴のある所を塞ぐのであります、然し之れは鼻梁の穴を塞ぐ事が出來ますが、鼻が全く缺けて居る人には、斯くして拵へた鼻は軟かである爲め吸氣毎に鼻孔を塞ぎますから呼吸を妨げます、そこで此の皮膚の中に何か堅いものを入れる事の必用を認めて、近頃は種々の軟骨を用ゐるのであります、最も多く用ゐられたものは他の動物の軟骨でありまして、さめ、兎等でありますが、此等は好結果を來した事が、少いのであります、それ故數年前岡田博士は、耳殼の一部分を切つて鼻を作りましてより鼻のかけた人は大なる福音を得たのであります、耳殼の上の方は少し位切りても左程醜くありませんから、鼻が缺けて居るよりは美貌の注文に適して居るものであります、殊に婦人にては耳の上部は髮で隱されてしまひますから一寸見えません、他人の耳を貰つてする時は、自分の耳を傷けないですむのであります。

蠟製の鼻

鼻の缺損が大きい時には、耳殼をもつて來ても十分之を塞ぐ事が出來ません、假令塞ぐ事は塞いだにしても到底美しいものとなる事はありません、斯樣な場合には蠟で作つた人造の鼻を置いて極めて微妙に出來て居りまして、鼻の缺損した所の孔に懸けておく樣に出來て居ります、そして其上から少し丁寧にお化粧を致しますれば、一寸見た所では蠟細工の鼻とは思はれぬ位であります、此れは形が如何なりと自由に出來ますから婦人には殊に適して居るかと思はれます。

パラフヰン注射

は最近數年間の流行物でありまして世の開業醫は何でも鼻の形がわるいと直ちに之れによりて、理想的の高い鼻を作ろうと試みて居ります、併し此れは誠に宜しくない事で、高い鼻ばかりが美しいといふものではなく、顏の形によりましては低い鼻が却て美

貌の目的に適するのであります、例へば丸顔の人に西洋人の様な高い鼻をつけましたなら可笑しなものになる事でせう、おかめさんは鼻が低いので愛嬌もあるのでありますから、其鼻を高くするのは大なる禁物でありまして、斯様な醫者は鼻の相といふ事を知らずに、パラフキン注射を亂用したものといふ可きであります。

此のパラフキン注射は主として鞍鼻と申します鼻の形を調整するに用ゐるものでありまして、時として低い鼻を高くするにも用ゐられます、此の方法によりますれば、鼻梁の甚しく凹陷した鞍鼻も立派な鼻となり、低いあるかなきかの鼻も高くする事が出來ますが、鼻の全く缺けて居るものには如何ともする事が出來ません。

パラフキン注射は又種々の危險をも伴つて居ります即ちパラフキンと申す蠟に似た物質を鼻の所に注射して隨意に鼻の形を作るのでありますが、此のパラフキンと申します物は、元來牛、馬等の皮、爪等より精製したものでありますから、其の消毒が不完全でありましたならば、其中には破傷風といふ恐しい病氣を起す黴菌が居りまして、爲めに一命をも失ふに至る事があります、鼻を美しくする爲めに命を失つてはなりません、其外にも消毒の不完全な爲めに其部が化膿したり、又は丹毒を起したりして、却て醜くなる事もありますから、注意せねばなりません。

（以下次號）

美容法（承前）

次に顔面の美を損する病氣としては、前に申述べた皮脂漏と緣の近い赤鼻、赤顔でありませう、これは日本人に於てはそれ程目に立ちませぬが、歐洲人になると隨分著しく美貌を損するものであります。

その原因は色々ありますが、大體これを三つに區別することが出來やうと思ひます。第一は單に血管が擴張した爲に、鼻或は顔面の赤く見ゆるもの、第

二は、この變化に加ふるに皮脂漏あるもの、言換へれば、元來皮脂漏性の皮膚へ以ていつて、或原因に由て前の血管の變化が起たもの、第三は、その何れでもないものであります。

その血管の擴張を來す原因は如何なるものかと尋ねて見まするに、例へば冬の寒い時に鼻の尖が凍えて其部分の血管が痲痺して擴がる、而して血液が滯るやうになれば、その結果赤鼻になる、又鼻の焮衝に依て直接に赤鼻になることもあり、他の部分の焮衝が鼻に及んで赤くなることもあります。西洋の貴婦人では、冬季に覆面を致しますと、それが氣息で濕つて、冷たい鼻の尖や頰の飛出して居る所を摩擦するので焮衝を起すと申すことであります。又鼻の內の病氣が、外の皮膚に及んで赤くなることもあり、又感冒に由て起ることもありますが、これは別に大した程のこともなく、大抵鼻中隔の粘膜に小さな創が出來て居る時であります。此等のものは赤鼻を治さうと云ふ前に、先づ以てその原因を除くことが第一であります。

右の凍冷、焮衝の外に、尙ほ第三の原因として、所謂反射性に來る、神經的の影響に由て起る赤鼻があります。この鼻と身體の種々の部分との間に關係があると云ふことは、昔から考へられて居つたのでありますが、今日では確かに證明されて居ります、例へば婦人生殖器と鼻との間には一種の關係があつて二十四五歲の婦人に赤鼻を見ることがある、また下腹部の病氣がある人、或は月經閉止期の婦人に於て赤鼻が起り、赤面になつてうねつた血管の現はれることがあります。これと同樣に胃腸の障碍とも關係がありまして、これは恐らく、酒とかコーヒーとか云ふものを澤山用うる結果、直接に起ることもありませうし、又その爲に胃や腸を害して、その毒に由て起ることもありませう、それで西洋では居酒屋の主人とか、咖啡店の女中などに赤鼻が多いと申すことであります、然ればと申して赤鼻を見て直ちにこれは大酒飲であると判斷するのは誤であります。以上

は單に血管が擴張して、一時鼻が赤くなり又これが持續して眞の赤鼻を成す原因であります。

次に皮脂漏性の皮膚の人で、酒を飲む人は赤鼻になり易い、又飲酒家が感冒にかゝれば赤鼻になる傾があるといふやうなこともありますが、しかし必しも左樣とは限らぬ。兎に角皮脂漏性の皮膚の人は、面皰、痤瘡などに罹り、又或人は赤鼻に罹る、而してその色は帶靑赤色で、太い、擴張した血管が見えて鱗屑を被ふつて、硬くなり、又どうかすると鼻の頭が覆盆子のやうなぶつ〱のある瘤のやうになることがあります。

尙ほ全く鼻だけに起る特別の皮膚病もありまして、これが爲に赤鼻になることもあります。即ち彼の狼瘡と云ふものは以上の二原因が助けをなしてこれに結核が加はつて起るものと考へられます。

多數の場合には、赤鼻には、特殊の原因があるものでありますが、その中でも鬚瘡などゝ云ふものは著るしいものであります、これは鼻の入口の角の處に在る毛の根の膿性炎症でありまして、往々赤鼻は全くこれのみが原因となつて起ることがあります。

斯樣に原因が種々でありますから、從つてその療法も一樣には參りません、鬚瘡が原因であれば、その毛を拔き去つて、適當の軟膏をつけて置けば、新しい健康の毛が生えると共に赤鼻も全く治つてしまふことがあります、又鼻の內部に創があつて起つたものは、先づこれを治療しなければなりません、又或場合には器械を以て鼻腔粘膜を按摩して大に效のあることもありますが、赤鼻の療法は主として外部から施すものであります、而して大抵皮脂漏が同時にありますから、何時でもこれを先づ療治しなければなりません、これには前章に述べた通り、硫黃劑がよく用ひられるのであります。これでいけなければ亂刺法を施して、同時に種々の藥劑を用ひますが、これは醫師でなければ出來ないことであります。凍冷に由て起つたものには電氣療法が最も效ありますが、これも醫師の事であります、其他重症になりま

すれば色々劇しい藥も用ひ、その手術も樣々のことを致しまして、恐しげな鼻も隨分見事に治ほる場合があります。水治療法と按摩法は必ずしも醫師の手を借らずして出來ますが、これは又あやにく效がないばかりでなく、反つて惡くすることが多い、實際水で以て餘り洗つたり擦つたり致しますと、ますます血管を擴張するものであります、又室の中から外の寒い處に出るとか、反對に外から室內に這入る時には、ガーゼをベンチンに浸して鼻にあてるのが善いと申しますが、實際效があるかどうか私は確には存じません、熱い湯に海綿を浸して拭ふことは、これも善し惡しであります。歐羅巴人が昔から赤鼻、赤顏の秘方として用ひたのは、タンニン五・〇とグリセリン一五・〇の合劑でありますが、これは效がある譯であります、タンニンと云ふものは皮膚に働いて、收斂作用を呈し、その細い血管卽ち毛細管を收縮させるからで、これは用ひても良い、卽ち毎晩筆で以てこれを塗るのであります。

內服藥にも色々の藥を用ひますが、劇毒藥が多いので醫師の處方にまたなければなりません。

飲食物については、別に取立てゝ申す程の處方はない、何が善いか何が惡かは誰も知て居る所である、但し酒客はその酒を飲むことを廢さぬ中は、とても其の赤鼻を治し得る見込はないのである。又婦人の下の病氣、腸及び胃の障碍は同時にこれを治療しなければならぬは勿論のことで、左樣のことが無ければ、能く治し得べき折角の療法も、此等一二の事に依て妨げられて、遂に治し得ない場合が往々あります。

（以下次號）

育兒

小兒の夏の下痢

夏季になると天地間の生物は悉く盛な發育を遂げる

ものでありますから、滴るやうな深綠の下に、燒くやうな日の光を避けて、玉を碎いたやうな溪流の上に、ハムモックを吊して、半日を讀書に暮すといふ避暑の樂をすることが出來るのであります、併し夏の炎陽はこんな樂觀的なことばかりを吾々人間に與へるものではなくて、怖るべき忌むべきものを人間に與へるものであります、それは何かといふと、黴菌といふものであります、黴菌も下等の生物でありますから、夏になりますと盛に發育生長致しまして恐るべき澤山の病氣を起すのであります、その澤山の病氣の內で小兒の病氣として一番恐べきものは、胃腸の病氣であつて、それ等は皆食物の不注意から起るものでありますから、小兒を保護養育すべき任にある人は、この際十分の注意を致さなければなりません、その心得の內で大切なのを二ッ三ッ述べて見やうと思ひます。

胃腸の病氣を防ぐには、胃腸を健康にすることと、毒物を胃腸の內に入れないやうにするとの二のことを心得てゐなければなりません。胃腸を健康にして置くといふことは、胃腸の自然の作用を害さないやうにすることであつて、哺乳兒であれば、母乳の外には一切食物を與へないで、乳を與へる時刻は規則正しく定めて置いて、泣くからといつて直に乳房を哺へさせるといふやうなことは、決してすることはなりません、夏ばかりに限つたことではありませんが、哺乳をする前後には、乳房を十分に清潔にすることが肝要であります、石炭酸などは使ふことは不必要でありますから、極く薄い硼酸水（百の水に三の硼酸末を入れる）をガーゼに浸して、それで乳房の尖端を十分に洗つて、それを克く拭きとつて小兒に乳を與へるやうにすることが肝腎であります。

少し年上の小兒になつて、乳の外に食物を與へてゐるものには、その食物を十分吟味して、甘過ぎるものや、水氣の多いものや、酸ばいものなどは澤山與へないやうにする、それ故果物や、納豆、餡のもの、豆類、氷、コンデンスミルクなどは用ひない方が安

全であります。夜には殊に何も食べさせないのが良いのです、腹部にはネルの腹巻をあてて、腹部と臀部とが冷へないやうにすることが必要であります、或る所の奥様は小兒の腹部を冷やさないやうにとて、腹掛をさせて置いたといふことを聞きましたが、腹掛は何もならないもので、夜中小兒があばれると直に上の方にはね返されてしまうもので、その役目をしないばかりではなく臀部を濕包することは少しも出來ません、寢冷をするといふことは、小兒の身體に大變害になることで、小兒でも大人でも寢てゐる間は身體の活動が弱くなつてゐるものでありますから、少し涼いだけでも直に感冒をひいたり、下痢を起したりするものであります、だから寢るときには臀部と腹部とを溫にして置くことが肝腎であつて、只腹部だけ溫にしたのではあまり、效能はありません、下痢は大抵は臀部を冷した爲に起るものであります、この臀部を冷して起る下痢は大腸加答兒といふ病氣でありまして、頂度赤痢のやうに、少し宛幾度も〳〵泡のやうなものが下つて、下腹が痛み、通のあとにでもまだ腹の內に何かたまつてゐるやうな心地がして、いつまでも便所にゐるといふ症狀を呈します、小さな小兒だと、熱が出て三十九度から四十度位に昇ることがあります、そうなると一寸癒りにくくなりますから、少しでも下痢の模樣があれば、直に醫師の診斷を受けることが肝腎であります、そこで一寸御注意致して置きたいことは、母親が醫師の言を守らないために、小兒の病氣を重くすることがあるといふことであります、大腸加答兒に限らず、すべての胃腸の病氣では、食物を與へるといふことはあまり良くないことで、時に依ては醫師が全く食物を與へることを禁ずることがあります、それは醫師の診察した結果食物を與へると、胃腸の病氣が尙ほ更惡くなるといふことを知つた爲に禁ずるのでありますから、確乎たる根底のある意見であつて、素人では一寸判斷の付かん所であります、それをも考へないで、小兒に何もやらないでは可憐

であるといふて、少し泣けば直に禁制を忘れて了て乳を飲ませるといふことは、世間に澤山あることで、醫師の方では、一日間食物を禁じて置たから、今日は餘程良くなつてゐるだらうと思つて、往診して見ると、昨日よりは惡くなつてゐる、これは不思議だと思つて、克く訊ねて見ると乳を飲ましたことが判るといふことは、度々あることであります、只少し病氣が惡くなつただけならば良いとしても、それが爲に助かるべき命をなくして了ふといふことになります、誠に不幸なことではありませんか、それからまた重い下痢で熱のあるときは、醫師は注腸といふことを致します、注腸といふのは、肛門から腸の內に澤山の藥を入れて腸の內を洗ふのであつて、大變效能の良い治療法でありますが、小兒の母親は醫師かぴか〳〵光つた器械を並べ立て注腸を行ふとすると例に依て小兒が可憐になつて來て、注腸を拒ることがあります、これは甚だ間違つたことで母親のために助るべき小兒は死んでしまうことになります、だから決して恐るゝことなく、進んで小兒に注腸を行つて貰つて早く治ることを計らねばなりません、一度注腸を行へば、大抵の下痢は治癒するものであります。

夏には食物が早く惡くなるものでありますから、知らずの間に惡くなつた食物を食べて、胃腸の內に毒物を入れることがあります、これは亦胃腸病の原因となるもので、餘程注意を拂はねばならんことであります。果物などは決して毒物ではありませんけれども、酸味があるために小さい小兒には大變下痢を起しやすい性質のものでありますから、これは與へないのが安全であります、その外前に述べたやうな食物は、惡くなりやすいものでありますから、小兒には食べさせない方が良くて、若しも與へやうとすれば克く吟味して極く新いものを選ばねばなりません。

モー一つ御注意を願いたいことは、小兒が下痢をしたときに、醫師の診斷を受けるには、必ずその大便

を何かに入れて、醫師の下に送ることであります、只下痢したといつた許では、小腸の下痢であるか、または、大腸の下痢であるかは判るものではありません、世間の開業醫の內には、大便の檢査をしないで、直に藥を呉れる人がありますけれども、それは病人に不親切の醫師であつて、信用することの出來ない醫師であります、大便がまるで水のやうであれば、罎に入れて持つて行くのが便利でありますが、若しそんなに軟くない便であれば、その便の形をあんまり崩さないやうにして持つて行かねばなりません。

腸加答兒の內で一番怖いのは疫痢といふ病氣であります、これは初めから高い熱が出て、時とすると痙攣を起すことがあります、疫痢は赤痢とは違つて餘り澤山はありませんから、母親は別に怖い病氣とも思はないでゐますけれども、實際赤痢よりも怖い病氣であります、そしてこの病氣は下痢を止めると、生命に危險でありますから、醫師は決して下痢を止めやうとは致しません、それ故母親もそれを良く心得てゐて、いつまで經ても下痢が止まらないからといつて醫師を代へたりすることは、大變間違つた考へであります、實際世間には、こんなことを知らないで、醫師を代へてそれが不注意な醫師であれば、良く診斷しないで下痢を止て了つて、それがために小兒は死で了たといふことは度々ありますから、十分心得てゐなければならんことであります。（終）

小兒言語の衞生

小兒が生れますると先づ第一に泣く、その泣聲が一種異樣に聞えるので、その原因、その意味について古來種々面白い說がありました、先づ西洋では、昔の哲學者は斯樣に申しました、男の兒は生れるとオー、アーと泣く、これは人間の先祖であるアダムが罪を犯して、その罰で人間が色々苦むやうになつたので、それを恨めしく思つて「オー、アダム何故汝は

罪を犯したか」と泣く、又女の兒は、オー、エーと泣く、これは同じく女の先祖たるエブを怨むで泣くのであると申しました、又ミッシエレと云ふ人は、靈魂が自然の爲に征服されるので、その驚の叫聲であると云ひ、カントと云ふ哲學者も、痛みや何かで泣くのではない、動かうと欲するのであるが、身體が思ふやうにならないので、自由を束縛される、その抑制を感ずるから泣叫ぶのであると申ましたが、段段研究して見ますると、左樣な六ケ敷いことではない、これは單に母體内から外界に出てその溫度の差が刺戟となつて、反射的に呼吸が始まつて思はず聲を出すのでありまして、吾々が室の内から外に出て嚏をするのとほゞ同樣の働に過ぎないのであります。

それからこの啼泣に續いて所謂レロ〳〵を云ひ始める、これは心持が善い時に發するので、生後三四ケ月になると段々著しくなつて來まして同時に手や足を動かして心持を表はすやうになります。而してウマとか、パパとかウガとか云ふやうな發音をして、漸次人の言語を模倣するやうになり、それから自分の思ふことを言語で表はすことが出來るやうになる、これが大體言語發達の順序でありますが、その發達には小兒の周圍の人の言葉が大に關係するのでありますから、それを正しく導き、障碍あれば適時にこれを認めて直はし、通常の發達に異つて行くのを防ぐやうにすることが出來る譯であります、此等の事を總括して小兒言語の衞生と申すのであります。

それで小兒言語の衞生に於ては、言語障碍の起るのを防ぎ、既に起つたものは適當の方法に依て矯正することを論ずるのでありますが、豫防法の方は、その已に成立した障碍を矯正することよりも、遙に大切で且つ有效なのであります、依て眞正の啞又は吃などのことは別にお話を致すことにして、玆には言語障碍の豫防について極普通の注意だけを少しく申上げて置かうと思ひます。

只譯もなく初生兒の啼く間は、別に言語に對する衛生上の注意は要らぬかのやうにも考へられます。初生兒の啼泣は、實に唯一の強い働でありまして、これで以て肺も擴がり胸も強くなるのであります。併しながら餘りひどく啼泣することは、その軟弱なる發音器關に取つて有害な影響を及ぼさぬ譯にはゆきません、少くとも甚しく啼泣する時に、その原因を求めて、泣を止めやうともせずに、一時間以上も放置するやうなことは正當とは申されません、赤坊は往々力一杯の聲を張上げて啼き、その間に急しく吸氣をして、喉頭に一種の吸氣音を發することがありますが、これが長く續けば確に害を來すものであります。

小兒が口を動かして、レロ〳〵言ひ始める頃になりますると、周圍の人の談話に依て興奮されて能くレロ〳〵を言ひ、又これを促すことも出來るものであります、これは發音器官を強くし、能く言語を使ひ得るやうになる助けとなるものでありますから、この方針で適當に心を用うれば小兒の爲になることで、全く害はありません。

次に最も大切なのは、模倣期の衛生法でありますが、此の時期に於て、特に注意しなければならぬことは

第一　小兒の言葉のお手本が善くなければなりません、その手本になる人の言葉が正しく明瞭であれば、小兒は容易にその發音を解して、能く眞似得ることは明かなことであります。

第二　惡るい發音のお手本は、速かに小兒から遠ざけるやうにしなければなりません、小兒の模倣力は非常に強いものでありますから此點については十分注意を要するのであります、兩親自らも、小兒に對しては、十分正確に、明瞭な言葉使を以て話すやうに勗めなければなりません。小兒に向つては通常の言葉よりも、所謂乳母などの用ひるアマとかオッパイいふ方が解かり易いと思ふのは愚なことで、寧ろ反對で、しかも後々までも損あることは、少し心ある人の直ぐ氣がつく所であらうと思ひます。唱歌の如

きものも、口の廻らぬ小兒の言葉をそのまゝに入れてあるやうなものは敎へてはなりません。乳母や保母などもその言葉は普通の言葉を用ひ、又これを雇ふ場合にも其發音に注意することが必要であります。この事に就ては既に羅馬の演說家のクインチリアンも注文して居りまして、乳母の發音の惡いのと間違つた言葉遣とは直ちに小兒に移つて、非常に不都合を來すものであると云ふ例は澤山ある、而して一人の小兒が言葉に惡い癖のついたのを兩親が氣が付いて、その乳母とか女中とかを取換へても、その兒の弟とか妹とか云ふものは何時しか兒の言葉に習つて、兩親は正しい言葉を遣つて居るにも拘はらず一家悉く異様の間違つた不快な發音を聞くやうになることがあります。

第三　小兒が發音の模倣を好まぬ時には、周圍の者がなるべく小兒に話をしかけて、その趣味を起さすやうにすることが必要であります、併し小兒に、直接後について發音させることは宜敷ない、三歲乃至四歲の小兒でも、直ぐ後についてその通り發音せよと催促されることは嫌ふものでありまして、只だお話することを面白いと思はせるだけの刺戟を與へれば澤山であります。未だ言葉の出來ない小兒にも、バババ、ダダダ、マママ、ラララ等の單純の發音が何の位その注意を引き、刺戟を與へるものであるかは、能く觀察せぬ人には解らぬであらうが、早く此等の音を覺えることは、小兒の習得力を增すに與つて力あるものであるとは、既に獨逸の有名な敎育家ペスタロッチーも言ふて居る所であります。この言葉の豫習は大切なことでありまして、これには先づ音を擇んで、經驗上小兒が最も早く言ひ出すもの、殊に耳ばかりでなく目でも能く解かるやうなバ、パ、マ、ダ、タ、ナ、ラ等の音から始めるのが宜しいと思ひます。

次に自分で話し出す時期になりますると、發音障碍を來し易い二つの事があります。第一には非常に話すことを好みますが、言語の器官が未だ十分でない

爲に起ることで、この場合には容易に言語につかへ、それから眞に吃音になることがあります。これは小兒が喜んで話すやうな、面白い譚を綴くり一句一句反復させて、發音に習熟させるやうにして防ぐことが出來ます。

第二には模倣や、自分で話し出すよりも、言語の意味を解する方が遙に早い爲に起ることであります。これは善い繪畫讀本を用うれば、頗る善く矯正することが出來るものでありまして、この單純な方法で以て、これを適當の時期に應用すれば、生來吃音の遺傳があつて、その傾のある小兒でも、永久にその吃音を抑制することが出來るものであります。

其他尚ほ口が重いとか、甘へるやうな言葉遣と云ふやうなものも小兒の中に、注意して正確に發音することに勗めさすれば、容易に直ほるものであります。又小兒の齒が拔け代る時に注意しないと、言語を不明瞭に、口の中で言ふやうな癖がついて了ふこともあります。

以上の如く言語の發達に注意して小兒を育てるならば、大概の發音障碍を豫防することが出來ますが、併し尚ほ防ぎ切れずして、遂に立派な發音の不具者に成つて了ふものもあります、これに就ては、又何時か改めてお話を致す積であります。

小兒口中の病

小兒口中の病と申ましてもなか〳〵廣いことで、可愛小兒の蕾のやうな口も、病氣は遠慮會釋がない、單に齒の生える時に涎を多く出して困るとか云ふ位の病氣もあれば、又水癌などゝ云ふて、初め小兒の口元に近い頰の粘膜に、蒼白い硬く腫れた所が出來たかと思ふて居る中に、忽ち頰を壞して二た目と見られぬやうな哀れな有様を呈し、而かもこれが大概他の病氣で甚しく衰弱して居る小兒を襲ふので、殆ど手のつけやうもない、實に殘酷な狀態に陷つて死ぬる、斯樣なものがあるかと思ふと、何人も御承知の

實扶的里などゝ云ふ傳染病が小兒の咽喉を狙ふと云ふ譯で、なか〳〵一朝一夕にお話の出來ることではありませんが、茲には左樣な恐ろしいもの又は稀にしかないものは省きまして、極普通に見る所のもので、よくお母樣方のお困りになる小兒口中病の一二についてお話を致しますれば、先づ第一にゾール即ち鵞口瘡、次にアフターと申す病氣で御坐りませうか。

鵞口瘡と云ふのは何んなものかと云へば、大抵先づ生れてから二週間或はも少し遲れて小兒に起る口の病氣で、生後五六日前には殆ど罹ることはない、又稍ゝ大きな小兒では結核とか窒扶斯などに罹つて衰つた時の外は餘り罹からない病氣ですが、隨分多い病氣であります。何んな風になるかと云ふに、最初に下唇、舌、頰の粘膜、殊に齒齦と口唇の間の處に僅かに隆まつた白い斑點が澤山出來て、一寸見た所は乳の渣が殘つて附いて居るのかと思はれます、それで俗には白舌と申して居ります、此の初期の間は、注意して口內を淸潔にしてやれば大槪治癒致しますが、これが一步進んで咽から甚しいのは胃の中まで蔓延するやうになれば、危險に陷ります。これは一體何に由て起るかと云ふに、畢竟小兒の口を不潔にして置くからでありまして、彼の麹を作る釀母の種類に屬して居る黴菌が不潔を幸に繁殖して斯樣な病氣を起すのであります。それでこれが口の粘膜を侵すと、赤坊は乳を飮まなくなります、これは乳を吸ふ時に甚しく痛むからでありまして、身體は瘦せ、下痢を起し、貧血して、胃腸を害して來ますから鵞口瘡の黴菌はます〳〵勢づいて殖えて、口中の粘膜が悉く汚穢ない色になることがあります、斯樣になつては、小兒は遂に餓死したり窒息したりして死ぬことがあるから油斷はなりません。これを豫防するのには何うすれば良いかと申しますと、小兒の口を常に淸潔にして置くことで、從て乳房殊に乳嘴を淸潔に保ち又哺乳罎もその通り何時でも淸潔なものでなければなりません、鵞口瘡に罹りました時には哺

乳の前後には必ず注意して、清潔なガーゼを以て口中を拭いてやらなければなりません、これには〇・七五％の食鹽水、五％の硼酸水、二％の鹽剝水又は〇・八％の過滿俺酸加留謨水などをガーゼに浸して、靜かに丁寧に拭淨て、又十％の硼酸グリセリンを塗布して大に效がありますけれども、稍々重症になつては是非醫師の診察治療に依らなければなりません。

次に阿布答と云ふのは何んなものかと申しますと、これは俗には何と云ふか存じませんが、なか〳〵多い小兒の口中病で、やはり脣、舌の緣、又齒齦、頰の粘膜等に麻の實か豆程の大きさの、圓い或は少しく長味がつた白い斑點が出來るのでありまして、其數は大抵二つ三つですが、これはなか〳〵痛いもので、乳を飮むにも、物を咀嚼するにも、話をするにも痛を感じますから、小兒は痛を避ける爲に往々口を開いて、唾を出すものであります。これは別に恐ろしいものではない、適當の療法を施せば大概一週間か十日位で治癒するものでありますが、口の奧の方まで蔓延することも稀にはあります、年齡は二歲から三歲の小兒で、最も多いのは齒が二三本生えた時でありますが、他の病氣に罹つて居る時に大人にもまゝ起りまして、實際小兒は何の位困るか、何の位痛いものであるかゞ解りますから、一度この味を知つた人は、小兒の阿布答に對しても餘程同情を持つて居ります。

阿布答に罹りますと素人も醫者も能く鹽剝の含嗽をさせますが、小兒は、とても斯樣な刺戟の强い藥を用ひられるものではありません、やはり硼酸グリセリンとか、枯礬の極稀薄な溶液を塗り、食前にはアチソンを塗布し又はオルトフォルムを撒布する位のことで、後は微溫湯で口の中を靜に拭き、飮食物も少し溫いものや冷めたいものは、しみて堪まりませんから微溫でなければなりません、但し冷水を含んで居れば、其間だけは餘程痛も減ずるものであります。早く治ほして了ふには、石炭酸や硝酸銀のやう

な劇しい薬を用ゐますが、これは本より醫者でなければ濫りに用ゆる譯には參りません。

何れにしても小兒の口を清潔にして置くことは、衛生上極めて必要なことで、特に夏は小兒の口にするものを一切清潔にすることに十分の注意を拂はれ度いものである、さうすれば唯に鵞口瘡や阿布答ばかりではない、口中の病は勿論のこと、一般に消化器病を防ぐに何の位效があるか解らぬ、單に哺乳罎の吸口や乳頭を清潔にするだけでも、小兒の消化器病は半分に減ずるであらうと思はれるのであります。

家庭衛生

熱射病

貴婦人が斯様な病氣に罹る氣遣もないのですが、これから追々暑くなつて參りますと、兵士や農夫などが罹る病氣に熱射病と云ふものがあります。よし自分は罹る危險がないにしても、避暑旅行をするやうな場合に、重い荷物を背負ふた供人や、車夫などが卒然斃れたりすることがないとも限りません、さなくとも田舍道に農夫や旅客の倒れて居るのに出逢はぬとも限りません、斯様な時には、何人と雖もこれを見過すやうなことも致しませんが、偖て醫者と云ふても急の間に合はず、助けてやらうとする慈悲心はあつても、何がどうしたのやら分からず、懷中に氣付薬があれば先づこれを含ませたりするでありませうが、それだけでは折角の慈悲心が未だ滿足せまいと思はれます、も少しその慈悲の手を延べて、何うかしなければ、教育あり用意ある文明婦人の一分が立たぬ、周圍のものに指圖するだけの心得が有つてよいと思ひます。

熱射病と申しましたが、日射病と中熱症とに分けてお話致します、日射病と云ふのは、長い間、頭を炎天に曝された場合に、卒然危險の症狀を發して倒れ

るのでありまして、先づ顔面が赤くなつて、呼吸が促しくなり、頭痛、眩暈、耳鳴がして、遂に目が暗んで倒れる、而して全身の痙攣が起り、瞳孔が大きくなり、患者は大きな聲を出して何か譫語を云ふたり、騒ぎ廻るやうなことがあります、脈は數が多くして弱く、體溫は時として四十度以上にも昇りますが普通の體溫のことが多い。

中熱症と云ふのは外から熱を受けたのではないが、身體の溫度が高まつても、これを放散するのを妨げられて起るのであります、それでこれは夏期軍隊の行軍の時に兵士がよく罹るものでありまして、殊に蒸暑い日に多いのであります、睡眠が不足であつたり、暴飲暴食をした翌日などは特に起り易いのであります、中熱症は非常に發汗して、顔面はやはり赤くむくんだ樣に見えて、眼も赤くなり、呼吸や脈搏が早くなり、體溫は四十度以上にも昇ります、而して患者は身體がだるくなり、頭痛がし、胸がわるく又嘔吐して、甚しく渇はきを覺え、呼ばれても返辭するのが厭になり言語も澁り、ぼんやりして瞳孔が小さくなり、終には汗の出るのも止んで、口脣や手足が紫色になつて全く氣を失ひ、振ひがきて、遂に心臟が麻痺して死で了ふのです、尤もこれには重いのも輕いのも色々ありますが、何んなものかは大體これで分りますから、症狀の詳細なことを申述べる必要もなからうと思ひますから、直ちに療法に移ります。

先づ斯樣な患者があつたならば、第一に木蔭のある涼しい處に運ぶのであります。それから直樣、身體に著けて居る荷物のやうな物は勿論のこと、その帶を解き、洋服を著て居るものなればボタンをはづして胸を開けて、新鮮な空氣にあたるやうに、扇いでやる。頭は濡手拭で冷す、若し顔が蒼い時には、頭を低くしなければなりませんが、赤い顔をして居る場合には高くすることが必要であります、而して濡れた布で身體を包んでやり、又は濡手拭で身體を拭くとか、水を灌ぎかけるのも良い、斯樣にして水を

一口づゝ與へ、若し人事不省に陷つて居れば、假令完全なことは出來ぬまでも、胸を壓しては緩め、緩めては壓して人工呼吸を試みながら、冷水で口を濕してやり、氣付藥を所持して居ればそれを口に入れて、醫師の來るのを待つと云ふ順序で、此の簡單な手當に依て死すべきものも蘇生致しますが、併し重症のものに至つては、助かるのは眞に僥倖と云ふてよい位でありますから、豫防が肝心である、それで炎熱を侵して勞働をする者には、笠や帽子の間に木の葉のやうなものを入れて冠り、時々胸を開けて風を入れ、或は頭部を冷し、又清涼の飲料を取るやうにして、折々樹蔭に休息することを勸めなければなりません。

衛生雜信（三）

○頭痛あり、胸痛あり、腹痛あり、腰痛あれば、衆人は直ちに其疼痛を以て病氣と見做し、切々として醫師にせまり、乞ふに其鎭痛を以て致し候へ共、本來疼痛そのものは決して病氣にあらずして、寧ろ吾人の生活に不正若くは非衛生的の所あるを說示警戒する一の信號に外ならず候。されば滊車滊船などが一度び危險の信號を見ば直ちに停車若くは停船するが如く、吾人も一と度び疼痛を感ぜば直ちに一身の所行と平生の生活とを省み、苟も衛生の方則に戾り自然の規律に矛盾する所あらば、之を撤回矯正するに力めざるべからず候。たへとば暴飮馬食のため腹痛を感ぜば、先づ無謀の食慾を制して節食節飮せざるべからず、過勞若くは便秘のため頭痛を訴ふることあらば、十分休息安眠し、又十分に排便せざるべからず候。その病原を去らずして疼痛のみを鎭靜せしめんとするは、根を發掘採取せずして木を枯らさんとするものに有之、大に疼痛の忠告警戒の意を解せざるものに御坐候。

○要するに病氣と云ひ、疼痛と云ふも、吾人日常の生活が、以て自然の法則に反戾するを示すものにて

候へば、吾人は自省警戒して其身邊に注意し、更に進んで疾病討伐の軍に身を投ぜざるべからず候。疾病討伐の武器は他なし、風雪に憶せず、寒暑に驚かざる積極的の健康と、敵を恐じず怖れざる勇猛心とに有之候。病魔の襲來に對して徒らに逃走彷徨するは『健康の戰士』たる所以にあらず、戰へよ、勝利は我にあり。本來健康幸福たるべく造られたる吾人が太刀を捨て、鎗を投じて、脆くも逃げ惑ふが如きは愚の骨頂とや申すべし。

○完全なる心身の健康と、合理的生活法との根本原理は實に上述の如くなれども、今日多數の同胞は全く之を閑却して、徒らに病魔の來襲に落魄消魂まかり在り候。器質的の病氣はよろしく良醫の加療に一任せざるべからざれ共、恐怖的の病氣、機能的の病氣、自製の病氣、空想的に頭腦に描き出したる病氣の如きは、又精神的に加療せざるべからず候。而かも今日の世、後者を要する場合のみ多きは轉た痛嘆の極みにては候はずや。

○身體に及ぼす精神の偉力は實に比ひなきものにて古來東西國民の共に驚嘆せる所に有之、近來に至りては之を系統的に研究して精神可能力 Mental possibility の無限絶大なるを承認せざるもの無之候。余は歐米の書册中より左に一二の著大なる實例を引用して、之が證左と致すべく候。

○リー將軍降伏の前夜、グラント將軍は甚だしき頭痛を患へ、或は芥子泥を足、項、腰等に貼り、或は入浴等により聊かにても之を輕減せんとせしが、疼痛益々加はりて苦惱毫も減せず、轉輾反側して徹宵遂に一睡をも得る能はざりしが、一士官がリー將軍降伏の一書をもたらせし時、之を一瞥するや否や、劇痛にはかに去り、神氣舊に復せしとの事に有之、氏は其日記中に左の如く記述いたし居り候『當時余は甚だしく疼痛に苦しめられしが、書中の内容を讀了する瞬間に於て、余は全く治癒せり』と。

○サンチアゴ沖の海戰にて、軍艦オレゴン號が全速力を以て進行せる時、未だ兵火を交へざるに、將卒

既に甚だしく疲勞し、元氣いたく衰へて見へぬ。機關長之を憂ひ、船長クラークに信號して『士卒に銃を與へ』と云ふや、『戰闘開始せり』と思ひ、沈衰困憊せる船中の元氣一時に溢れ、活火頓に燃へ上がれりとの事に候。

○嘗てワイマールに於てメランクタンがいたく惱み其眼は沈み、其舌は乾き、其意識は殆ど亡失して枯槁憔悴の狀態にありし時、ルーテルは之を見て其傍らに跪き、後ち起立して『病める友よ、しつかりせよ、汝は決して死することなし、死を除き生を與ふるは神の欲するところぞかし、神を信ぜよ、さらば汝に清新なる生命の與へらるゝや必せり』と大呼するや、今迄病めりしメランコタンは、急に平常の氣力に復せしとの由に御座候。

○フロレンスのロツギア、デ、ランチーにある彼の有名なるベルゼウスの銅像は、ベンベヌト、ツエリニー氏の鑄造せるものゝ由に候が、氏が之を鑄造しつつありし際、氏は不幸にも卒然高熱に襲はれ、直ちに歸宅して臥蓐に縛めらるゝの身と相成り候。然るに病勢の頗る危惙にたへざる際、一人の鑄工が倉皇病牀に走せて、ベンベヌトよ、おん身の鑄像は既に敗壞して之を救ふに由なからむ』と云ふを聞くや慌しく工衣を纏ひて鑄場に至り、折しも降りしきる雨を犯して乾燥せる新炭を搬び、一心不亂に火を竈の中に點し、漸く之れを鑄終うせしとの事に御座候。氏は當時のことに就き左の如く語り候『余は凡てを成せし後ち、其傍らにある食卓に向ひ、多く食ひ、多く飮み、尙ほ早朝なりしを以て再び寢に入り嘗て疾病の何たるを知らざりしものゝ如く、樂しく快く、十分健康に眠り得たり』と。ベンベヌトの精力熱心は實に絕大絕妙なる神力をあらはし、能く危重なる疾病にうち克ち、之を健康ならしめしものに候。

○エール大學の教授ダブルユー、チー、アンダーソン氏は、精神が身體に及ぼす作用につき、近頃實驗的に證明して其成績を收め候。その實驗の次第は左の

如くに御座候。一書生をして體重を測るべき秤の上に其體重の重心が正しく秤の中心に一致する如く臥せしめ、秤の上にて或る數學問題を解答せしめしに計算の間頭腦内の血量增加せるため、頓に體重の重心を變じ、秤は頭惱の方面に傾斜せしとの事に御座候。而して數學問題の六かしき程、傾斜の度合ひも著しかりし由に御座候。次に同書生をして同じ秤の上に於て、假りに兩脚の運動をなしつゝあるものと想像せしめ候ひしに、血流の脚部に注ぎ入れるがため、又體重の平均を失して秤は脚の方向に傾斜せしとの事に御座候。氏は之を幾度びか多くの書生に就きて實驗せしに、いつも同樣の結果を得しとの事に御座候。その實身體を動かさず、單に精神に思考せしのみにて、かくも甚だしき影響の存するものとは誠に驚くべき次第に御座候。

處女の衛生（承前）

健康な婦人の血液のうちには、一立方仙迷の中に赤血球が、四百五十萬ほど含有して居るのであります。然るに萎黄病になると、其赤血球の數が減じます。其減じ方は一立方仙迷で、凡そ百五十萬ほどです。卽ち丁度三分の二になる勘定となります。血色素もまた萎黄病のときは、常に減少して居るので偖こそ皮膚の色や、粘膜の色が蒼ざめて參るのであります。

身體の中では、始終細胞が燃燒作用を營むのでありますが、萎黄病の患者で、血色素の量が減少して居るならば、患者の身體中に存する酸素の量も從つて少いのであります。此酸素の量は、身體が働く上に最も大なる關係をもつて居ます。これは身體が働く場合には、多くの酸素を要するからであります。それであるから萎黄病に罹つて居る處女は、少しのことでも、疲勞し易い、且呼吸が苦しくなつて參るし

少し努力して働くと、胸が狹くなるやうな感じをするやうになる。

身體內の燃燒が十分思ふやうにならぬ結果、殘り物が出來る、これが脂肪になる、だから、萎黃病の結果身體が肥つて來るやうなことも決して稀ではありませぬ。

結婚によつて、萎黃病が治癒すると云ふ俗人の考は決して正統な考ではありませぬ、萎黃病は、新鮮な空氣中で、運動すること少なき場合に來ること多く從つて、田舍の人よりも、都會の人にくる場合が多いのです、殊に紡績及び裁縫、或は製造場にて業を執るもの等に於ては、餘程多い、これは終日惡い空氣の中で、仕事に勵まなければならぬからであります。

次で萎黃病の原因となる所のものは、身體の過勞であります。又劇しく勞働する田舍の處女にして、榮養品の惡しきため屢々萎黃病に罹ることあり。其他本症は、先天性の素質にも關係あり、血液を造る器官に何か先天性の弱點があるために發生することもあります。

血液は常に健康の狀態でありたいものです、これは全身にめぐつて居るから、何か變調があると、直ぐ影響が現はれて來る、始終健康な血液を保有するためには、食物の注意を缺いてはなりませぬ。

即ちその食物は、十分に食べて、且血の製造を助けるものでなければなりませぬ。この目的には、卵や肉類がよろしい。婦人の方には、肉類を避けて、植物性の食物を嗜しむ傾がありますから、次第次第に馴れて肉食でも好んで戴けるやうにする方がよろしい、且又眠る時間を十分に得ることも必要です。

併し、食物も理想的にし、睡眠も十分にしたとて、それで萎黃病に罹らぬとは申されませぬ。即ち田舍に住んで居る處女は、都會の人に比較すると、概して肉食することも少ない、が、萎黃病に罹るのは、却つて都會に住んで居る人の方が多い。物質交換がよく行はれて居ると、其爲に身體は異常を招かず、

攝取した榮養物がよく類化して、そして、血液の形成を扶けます、併しこれは、筋肉の働作が適當で、そして、郊外の活潑な運動によつて十分に遂げらることであります、空氣の淸潔な場所で、身體をよく運動させるだけでも、器官には大にためになります、それだから、下等の榮養物をとつて居ても、而かも尙ほ血液の製造をよくします。これに反して、始終座つてばかり居る人は、食事をよくしても、貧血を防ぐと云ふことは困難の場合が多い。

我等の身體にある種々の器官は、細胞の力で、始終燃えて居るのでありますから、若し其器官の作用が高まつた時には、其燃燒作用も、從て强められる筈であります。此燃燒作用を盛にしやうと思ふと、どうしても材料を送らねばならぬ、急行列車に石炭を吝んで居ては、其目的を果すことが出來ませぬ。

燃燒作用の材料は何であるかと申すと、榮養物質と酸素とであります。此二つのものは、血液に運ばれてそして、各種の器官內に在る細胞にまで配達されるので、郵便配達が家々に郵便物をくばるやうなものです、そこで榮養物を受取つた器官は、サア榮養品の到著と云ふので、忙がしく仕事をしなければならぬやうになつた、極めて忙しい、そうすると血の流れが、段々と此方へ强くなつて來る。又筋肉を活潑につかふ場合もこれと同じことで、矢張り其部分に血液が多くやつて參ります。

空氣中の酸素を多く取るには、呼吸筋が、大に立働かねばなりませぬ。即ち呼吸の數が增して、そして深くなつて參ります。これと同じことで、心臟の方でも仕事が忙しくなりますから、其作用が速くなり又强くなつてきます。そこで血がいよいよ速に全身をまわることゝなります。

活潑な呼吸の作用によりて、肺に來る酸素の量は多くなつて來るし、此酸素は血管を通つて全身に廻るそして此酸素を多く含んだ血液は、種々の器官の中を活潑に通過いたします。斯くして榮養物と酸素は全身に供給せらるゝのであります。それであります

から、若し新陳代謝が盛であれば、身體の總活量は盛になつて參ります、このやうに身體の精力が強くなつて來ると、血液を製造して居る部分もまた隆盛となるのは固よりのことであります。（以下次號）

日常生活の衞生（承前）

前回には自個觀察のことから自信と云ふことに申及びましたが、此の自信といふものは、自分が眞に出來るといふその技倆と力を知る所より起るものでありまして、これには一通りの修業鍛錬が必要である
その修業鍛錬と云ふものは、仕事をする間に種々の事柄に出逢ふて、段々に鍛へられるのであります。尤も技倆と云ふことに至ては、各々其人の性質に依り、その仕事の異るに從つて異るものであります。
さて仕事をするに方つて特に大切なる事は、精神勢力を集注することでありまして、心散漫にして行ふ所の仕事は、熱心に心を籠めてする仕事に比べますと、非常に骨が折れて、而かも出來ばへが惡るい。それで樂んで、滿足して、その仕事の成績に興味を以て働く人は、格別なるもので、餘り苦みもせずに非常な大きな仕事を成就するものであります。それ故に今從事して居る仕事の如何なるものであるか、これが如何に出來るか、出來上つたなら、どうするか、且つ自分は社會の一員として働いて、多少でも文明の進歩に貢獻しつゝあるのであると云ふことを考へるならば、一般の勞働者も大に勇んで勉强するであらうと思はれます。兎に角仕事をするものにはその仕事に依て喜を得、人間としての價値をそれに依て感ずるやうにしなければなりません。
これには二兎を逐ふ者は一兎をも獲ずと云ふ格言の通り、一度に多くの仕事をやらうと思ふは不可である、是非兎は一匹づゝ射止め、一つの仕事を成就して次に他の仕事にかゝらなければなりません、而して一旦手を著けた仕事は全力を注いで、中絶せぬやうすることが肝要であります。所が實際一つ一つに

は出來ない職務がありまして、例へば大事業大會社の管理者の如きは、今此事を計劃して吩咐ければ、次には別な問題について商議しなければならず、又他の事を整理しなければならぬと云ふ風で、とても一つだけの仕事にかゝつて居ることの出來ない人もあります。それで段々世の中が複雜になつて參りますと、早く勢力を消耗して了まつて、所謂神經衰弱症に罹る人が多くなる次第でありますが、兎に角一つの仕事に勢力を集むることに依て一定の動かざる力を得るものであります。

次に必要なるは勞働と休息との交換でありまして、仕事の爲にその力を消耗し盡して了はず、適當に勞働と休息とを分離する、これは殊の外緊要のことであります。卽ち仕事をする時には、全力を注いで仕事をし、休む時には、決してその仕事に拘はらぬと云ふことであります。

然らば一體どの位仕事を續け、何の位休息すれば良かと云ふ問題になりますが、一日八時間と云ふのは先づ最も廣く各社會に亙つての通則でありまして、適當と認められて居ります。然しながら精神的の事業に與つて居るものに取ては、此の通則は、只だ出來る時には實行するが良いと云ふだけであります。何故ならば、精神的の仕事に於ては、一つの仕事を終までして了ふと云ふことは、非常に大切なことでどうしても一段落のつかぬ中は止める譯にいかぬことがあるからであります。且つ精神的の仕事に從事する者の能力には、又種々の差異があるものでありまして、或者は四時間でして了ふ仕事も、他の者は八時間かゝる、その代りに前の者は甚しく疲勞して後の者よりも仕事が續かなくなると云ふやうなことがありまして、一概には規則を立てる譯に參りませんけれども、天性非常な精力のある人でない以上はその神經を害さずして仕事を續け得る時間は、やはり先づ八時間を限りとしなければなるまいと思はれます。

（以下次號）

雜報



○產婆規則改正

去月四日勅令第二百十八號を以て公布せられたる產婆規則改正の條項は左の如し。

第一條　產婆タラントスル者ハ二十年以上ノ女子ニシテ左ノ資格ヲ有シ產婆名簿ニ登錄スルコトヲ要ス

一、產婆試驗ニ合格シタル者

二、內務大臣ノ指定シタル學校又ハ講習所ヲ卒業シタル者

第四條　第二項中「合格證書」ノ下ニ「又ハ卒業證書」ヲ加フ

第九條ノ二　產婆ハ自ラ檢案セズシテ死產證書又ハ死胎檢案書ヲ交付スルコトヲ得ズ

第十六條　第五項中「第九條」ヲ「第九條ノ二」ニ改ム

これと同時に內務省令第十六號を以て產婆名簿登錄規則中左の改正を加へられたり。

第一條中第三號ヲ左ノ如ク改ム

三、產婆規則第一條規定ノ資格及資格ヲ取得シタル年月日並ニ同條第一號ノ資格ニ付テハ試驗ヲ受ケタル地方廳名

產婆名簿樣式中「產婆試驗ニ合格シタル地方廳名年月日」ヲ「資格、資格取得年月日、受驗地方廳名」ニ改ム

○東京の氷

天然氷採收所は常設のもの二十一ヶ所の外、臨時の河川を區劃して採收するもの及び人造氷製場十數ヶ所あれども、未だ一般の需要を充たす能はずして、例年北海道、長野、神奈川、栃木等の地方より搬入す、その大部分は北海道產にして函館より船積にて橫濱に入り、それより艀舟を以て東京市神田、日本橋、京橋、本所等に分配し、長野縣は諏訪輕井澤等より、栃木縣は日光、宇都宮等より何れも汽車積として秋葉原若くは飯田町停車場に送り、又神奈川縣の氷は橘樹郡、都筑郡等より車積にて澁谷、新宿方面に到着す、此等のものを合算するときは、其量頗る巨額なるが、殆ど總て東京に於て消費せらるゝものなりと云ふ。

○東京市の下水工事

久しく問題たりし東京市の下水工事は、今回の腸窒扶斯流行等に促がされ、愈〻その急務なるを感じ、漸くこれが調査に着手し、五百八十萬圓の豫算を以て明年度より工事を開始することゝなれり、而して先づ衞生上最も必要と認められたる淺草全區及び下谷、神田兩區の一部より起工すべく、淺草區は一帶に低地なるを以て、箕輪、金杉を經て日暮里に五萬餘坪の貯水池を設け、それより喞筒仕掛にて隅田上流に放出せしむることゝなるべし。

○鍼灸按摩術營業者

本年三月十日の調査に依れば、東京府下に於ける鍼灸術營業者は千二百十六人にして、マッサージ術營業者二百三十五人、按摩術營業者千三百六十一人ありと。

○敎育家の結核

明治三十九年及び四十年の調査に依れば、肺結核に因する死亡者は公務及び自由業者に於て著しく就中敎育家に最も多きを見る、即ち死亡總數中肺結核死亡は十一％にして、內公務及び自由業者十七乃至十八％に當り、敎育家は實に三十三・四％の多數を示せり、然れば敎育家三人の死亡に付き一人宛の肺結核死亡なり、而かもこれ皆敎職に從事中死亡せるものゝ數なりと云ふ。

○米國赤十字社小兒保養所資金

米國赤十字社にては、昨千九百九年小兒保養所設立資金を得んと欲し、クリスマス切手を發賣したるに其賣上げ高二十八萬圓に達せりと。

○バイエルン王國の酒舖制限

獨逸バイエルン王國總理ボーデウイルス男は、近時國中の各地方長官に向て、管下の酒舖特に火酒小賣店、立飮所の數を制限し、又飮食店に於て麥酒を飮まざる客には食物の價を高くする弊風を除去するに努むべき旨の訓令を與へたりと云ふ。

○佛國の妊婦保護

佛國の國民增殖力衰頽、人口の減少は隱れもなき事實にして、百方これが原因を討究し、その防遏法

を講じつゝあることなるが、今回また漸く法律を以て、勞働に從事する妊婦の保護法案を規定し、勞働に從事する婦人の妊娠したる者は、出產の前後八週間は、其雇傭契約を解かるゝことなく職業を休み得ることゝなせり。

大日本婦人衞生會記事

○山縣支會例會

山形支會に於ては六月十一日午後一時より女子師範學校内に例會を開き、西野醫學士、傳染病につきて有益の講話あり、右了りて例により割烹實習をなし、四時過散會せり。

○高崎支會總會

高崎支會にては五月十五日をトし、同市柳川町幼稚園に於て第八次總會を開けるが、その順序は左の如くなりき。

一、開會の辭　會長
一、御令旨捧讀　幹事
一、庶務報告　幹事
一、衞生講話　堀越講師
一、君ケ代（オルガン）幹事
一、會計報告　幹事
一、役員選擧

當日出席の役員は星野會長、三橋、齋藤、津田、土谷の四幹事、高草木、佐藤、相川、高橋の四評議員にして閉會を告げしは午後五時なりき。尙ほ右役員選擧の結果は左の如く發表せられたり。

支會長　星野きよ子
副會長　相川すか子

幹事　（點數順同點は入會順）

齋藤れう子（庶務）　土谷ひやく子（庶務）
三橋ひろ子（庶務）　天利いし子（會計）
長谷川りて子（會計）　津田くめ子（會計）

評議員

津田しの子　内田くり子　山崎けい子
相川はま子　新井いち子　高草木かね子
高橋篤子　佐藤たね子　渡邊紀子

財津いく子　福田あい子　相澤小松子

○本會總會寄附者芳名

金參圓也　濱尾作子
金貳圓五拾錢也　岩下ゆか子
金貳圓五拾錢也　山本多穗子
金貳圓也　高木錄子
金貳圓也　濱田拾子
金貳圓也　緒方悅子
金貳圓也　長谷川仲子
金貳圓也　中濱芳子
金壹圓五拾錢也　吉武輝枝子
金壹圓也　山口てい子
金壹圓也　松平芳子
金壹圓也　羽田三緒子
金壹圓也　小川孝子
金壹圓也　岡田德子
金壹圓也　宮下咲子
金壹圓也　片山かめ子
金壹圓也　鳩山春子
金壹圓也　宮本樂子
金壹圓也　丹波貞子
金壹圓也　三宅藤子
金壹圓也　三浦敬子
金壹圓也　石川さだ子
金壹圓也　土肥多越子
金壹圓也　田村きよ子
金壹圓也　松井正子
金壹圓也　岸澄子
金五拾錢也　高橋孝子

以上

○寄贈書籍

教育病理學（ドクトル富士川游、醫學博士吳秀三、醫學博士三宅鑛一講述。日本兒童研究會編輯、全一冊定價金壹圓二拾錢。同文館發行）

書名は六ヶ敷けれど、文は談話の體にて、何人と雖も面白く讀み得べし、先づ總論、精神低格の兒童、精神薄弱の兒童、教育治療學等に分ち、育兒上閑却すべからざる諸般の事柄を說けり、教育家は勿論、子女の教養に心を用ふる家庭に向つては、必讀の良書として推薦すべきなり。

衛生試驗彙報第十一號（内務省衛生試驗所纂著）

衛生試驗所各技手の行へる、日用品及び藥劑等に關する精密なる試驗成績三十六を收む、皆以て貴重の業績たるを失はず。

家庭看護法（ドクトル兒玉修治述。定價金參拾五錢。内外出版協會發行）

章を分つこと十二、家庭看護の心得、傳染病、呼吸器病、胃腸病、腦神經病、小兒と母の心得、婦人病と出產前後、醫師の手助等の諸項につき、簡明に而かも懇篤に說けり、尙ほ救急療法を附錄とす。

呼吸器健全法（遠江保譯纂。定價金四拾錢。内外出版協會發行）

本書は、呼吸器の構造及び作用、肺臟を健全ならしむるに就ての注意、病體に關する衞生の三篇より成る、著者幼時呼吸器病を患ひしも攝生に依て今は壯健常人に超ゆるに至れり、依て歐米の醫書より譯纂して、廣く此健全法を廣むと。

○本會入會者

○松平芳子紹介

●麹町區永田町村井吉兵衛方　特別會員　村井孝子

●麹町區中六番町三十九　特別會員　村井君子

●麹町區中六番町五十六　特別會員　村井光子

○石栗とせ子紹介

●麹町區富士見町二丁目　特別會員　折田しゆん子

●小石川區關口臺町六十一、和田方　通常會員　八木美代子

○立井綮子紹介

●沖繩縣那覇區字東　通常會員　富永おと子

●同　通常會員　金城貞子

●同　通常會員　麓道子

●同　通常會員　杏はる子

●同　字西　通常會員　藥師つる子

●同　立井病院内　通常會員　鮫島芳子

●同　字久米　通常會員　種子田のし子

●同　通常會員　小野孝子

●同　通常會員　大久保はな子

●同　通常會員　山之内卓子

●同　字松尾山　通常會員　德田松子

●沖縄縣那覇區字松尾山　通常會員　齋藤たま子
●同　通常會員　岸本しか子
●同　字泉崎　通常會員　堀内あや子
●同　通常會員　金城米子
●同　通常會員　川尻八重子
●同　通常會員　中川しづ子
●同　字久茂地　通常會員　伊藤いす子
●同　通常會員　小山すゑ子
●沖縄縣首里區字當蔵　通常會員　野田もと子

○中川房子紹介

●秋田縣平鹿郡川西村十日町　通常會員　太田千代子

○酒井邦子紹介

●芝區高輪南町四十七　通常會員　松原とよ子

○莊司秋次郎紹介

●小石川區久堅町七十四　通常會員　篠田ふみ子

○事務所申込

●小石川區武島町九　特別會員　森井きぬ子
●神田區淡路町二ノ四自轉車商會内　通常會員　千足繁子
●北海道札幌高等女學校　通常會員　校友會
●名古屋市東區富士塚町　通常會員　名古屋裁縫女學校

○新潟支會入會者

○吉村きよ子紹介

●　通常會員　江口よし子
●　通常會員　稲垣あや子

○山形支會入會者

○友田ため子紹介

●　特別會員　西野さだ子

○佐藤たみ子紹介

●　通常會員　辻本るい子

○轉居

●麹町區下六番町五十二へ　三浦とき子
●高知縣安藝郡川北村へ　岩村たま子
●京橋築地一ノ二十六へ　岡本晴子
●央市山手通十二次一へ　藤木竹上子
●赤坂區青山南町三ノ五へ　下村ちと子
●大久保西大久保四十六へ　杉本加納子
●天韻園大和田炭山池田鑛泉病院へ　池田なつ子
●大連兒玉町八一　久保田不二子
●静岡縣興津町清見寺一二四へ　山梨識子
●府下内藤新宿北町九へ　藤田さだ子

新案特許 一〇三六二號

衛生的なる改良かもじ發賣



本品の特長

一、根元にコロップを装置せるにより舊式のもの如く硬からず膚ざわり軟らかなり

二、皮膚を摩擦する事少きゆゑ頭のはげる憂なし

三、頭痛癖ある婦人にも用ひて爽快を覺えしむ

四、二百度の熱蒸氣にて消毒しあれば毛髪の傳染病を媒介する憂なし

◉丸髷 金十五錢より 金七十五錢迄

◉島田髷 金三十錢より 金壹圓五十錢迄

◉銀杏髷 金二十錢より 金六十錢迄

◉送料 各八錢

◉諸かもじ製造販賣

東京市神田區豊島町十七番地
【振替貯金口座一八一八八番】
田中金三郎

◉小賣特約店

京橋南傳馬町 大西白牡丹
本郷三丁目 兼康
淺草駒形 百助
淺草駒形 紅勘
神田區須田町 三井屋
日本橋通二丁目 柳屋

特約店

神田區橋本町三丁目 勝本治助
日本橋區田所町廿一 山三商店
同 横山町一丁目 安井治太郎
同 馬喰町三丁目 蔦新商店
日本橋區若松町 松葉屋紋太郎
同 横山町一丁目 天野源七
同 馬喰町三丁目 阿部錠
同 橘町四丁目角 島村商店
日本橋馬喰町二丁目 飛川商店
同 横山町二丁目 江川小間物店
同 横山町二丁目 森本支店
外全國到る所の小間物店にあり

廣告

過般役員會の決議に依り、
本會七月例會は、本年に限り、都合上
休會致事と相成候間、此段會員諸姉
の御了承あらむことを乞ふ。

明治四十三年六月

私立大日本婦人衛生會

明治二十六年四月四日第三種郵便物認可

私立大日本婦人衛生會徽章規程

第一條　大日本婦人衛生會會員は其會員たることを表するため左の徽章を用ゆ





○本會徽章料左の如し

○通常會員章

第參號　メツキ製拾貳錢、送費六錢

第貳號　正銀製四拾錢、送費六錢

○終身及特別會員章

第壹號　七拾錢（黑塗箱入送費九錢）六拾錢（桐箱入送費六錢）

第二條　會員章は本會並に支會の集會に出席する場合は勿論襟止兼用の便あるを以て成るべく平素佩用して廣く本會の普及を圖るを要す

第三條　本會徽章は右の實價を以て會員に頒つ

○入會注意

○御入會の際は三ケ月以上の會費前納にて申込まるべし會員章は上段記載の實價にて御頒ち申候へども送費とも必らず御前納のこと●東京府下に限り毎月雜誌の配達を兼れ會費領收人を差出すべしと雖も郡部の方は地方會員の部として領收人差出不申候但東京府下の會員にても會費前納せられ合せて郵送料をも御納附相成候へば雜誌發行次第直ちに郵送可致候●追て支會々員は支會へ會費御納付のことゝす●會費は郵便小爲替にて本會事務所々在の郵便局（東京麴町區富士見町郵便局）宛振出しあるべし●會費受領證を要する節は送費として郵劵一錢五厘封入せられたし●轉居せられたるときは其の旨必らず本會事務所宛通知せらるべし

○會員御紹介下され候御方には其人數丈の本會雜誌を進呈す

廣告料　一頁五圓半頁其二分一以下同之●特別廣告一頁拾四圓半頁其二分一以下同之　本誌一部定價貳拾錢

東京市麴町區富士見町二丁目三十二番地
發行所　私立大日本婦人衛生會
（振替貯金口座東京一〇六〇〇番）

東京市本郷區駒込追分町三十番地
編輯兼發行者　莊司秋次郎

東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地
印刷者　今井甚太郎

明治四十三年七月十六日印刷　明治四十三年七月二十日發行（毎月一回二十日發行）
印刷所　東京市本郷區駒込